明治二十九年

女學雜誌

八月刊行

第四百貳拾五號目次

明治女學校新築費募集廣告

謹んで吾國同胞兄姉諸君に訴ふ。弊校十年の志望を守り、倍女學に盡瘁せんことを期念し、速に新校舍の與へられんとを祈る。冀くは、有志同情の諸君、之に對して義捐せられんとを。

明治廿九年二月

東京麴町區下六番町六番地

私立 明治女學校

特別廣告

右取次……女學雜誌社……

岡山孤兒院より『金八圓拾貳錢六厘』を寄附せらる。是れ實に汗血斷食の餘滴たり。之を受けて感激不能禁、特に之を別途の積立とし本校基本金の基礎となす。冀くは、四方有志の諸君、亦た別途の義捐を寄せて、此が上に積加せられんとを。

報告

本校は從前の通り橫濱野毛月岡町二百拾番假校舍に於て來る九月十六日より開校す　是迄本校設立の眞目的を屢々誤解せられしを以て今茲に最一度之を說明せんとす本校は幸福なる家なく困難に逢える者の可住家として立たるものにあらず又は普通學問を修むる所にもあらず本校は即ち聖書と實地傳道法を教授し卒業の後は婦女小兒の間に在つて神の爲め實効ある働を可成婦女子を養成するにあり左れば我等は今熱心忠實なる基督信徒にして他に出て勉強するとを得る姉妹諸君に主の爲め直接傳道と云ふとに付き祈を以て熟考せられんとを求む神の召し給ふ人は貴賤貧富、學者無學者、幼き老たるの別なく唯身と心を全く主に捧げ淸淨なる心を有つ者にありて我等は必ず神が諸愛姉を召し給ふとを信ず若し神諸愛姉の心に此聖なる幸福の事業に從ふの念を興し給はば直に我等に告げ給はんとを願ふ實に刈入物は多く働く者は少し終りに全國各教會の牧師諸君に求む若し熱心なる婦人信徒にして教師より傳道者となる教育を受るに足る人物あらば此校の設あるとを知らしめ且我等に其人に付報せられんとを願ふ

規則書幷に詳細は野毛月岡町聖經女學校校長に尋ね被下たし

明治廿九年八月廿八日

橫濱山手二百二十一番

聖經女學校

明治女學校新築費募集
第三回報告

金百圓　原富子殿
金貳拾圓　石崎ろく子殿
金貳拾圓　ホイトニー夫人殿
金拾五圓　大山侯爵夫人殿
金拾五圓　大山侯爵令孃殿
金拾五圓　淺田貞二郎殿
金拾貳圓六拾錢　瓜生夫人取次
金拾圓　鍋島侯夫人殿
金拾圓　前田侯夫人殿
金拾圓　岸田吟香夫人殿
金拾圓　ミス、デビス殿
金拾圓　毛利公夫人殿
金拾圓　番町教會婦人會御中
金六圓五拾錢　遠藤花子殿
金五圓　原れい子殿
金五圓　久保とみ子殿
金五圓　磯野きく殿
金五圓　小栗富二郎殿
金五圓　水野子爵夫人殿
金五圓　岩崎久彌夫人殿
金五圓　鈴木歌子殿
金五圓　森寛子殿
金五圓　横濱共立女學校慈善會御中
金五圓　日本橋教會御中
金五圓　佐藤殿
金五圓　河本かめ殿
金五圓　島田のぶ殿
金五圓　ミス、ミリケン殿
金五圓　ミス、マンロウ殿

金四圓五拾錢
金參圓五拾錢
金參圓拾錢
金參圓
金參圓
金參圓
金參圓
金參圓
金參圓
金參圓
金參圓
金貳圓八拾錢
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金貳圓
金壹圓五拾錢
金壹圓四拾錢

高田耕安殿
青山學院生徒諸君御中
フエリス女學校
有志諸君御中
中初子殿
中千代子殿
田中道子殿
ラング夫人殿
チヤペル殿
高木富子殿
佐伯さくら子殿
佐藤清子殿
坂寄安殿
田中らく子殿
岡田村殿
松井いく殿
菅沼花殿
佐藤やす殿
日高りき殿
松井まん殿
小西一女殿
河村八重子殿
穗積歌子殿
菊地恒子殿
大日方喜惠子殿
伊藤あや子殿
兩國教會諸君御中
佐藤久子殿
小島清子殿
今村梅代子殿
峰ゆり子殿
江妙子殿
宮本仲子殿
岩村通俊殿

金壹圓貳拾錢	辻初子殿 辻繁子殿
金壹圓拾錢	河口殿
金壹圓	須郷八重子殿
金壹圓	前橋共愛女學校有志生徒諸君御中
金壹圓	八木原ぎん殿
金壹圓	三浦とう殿
金壹圓	小崎八重子殿
金壹圓	丹羽賛子殿
金壹圓	池田作次郎殿
金壹圓	フルベッキ孃殿
金壹圓	御園濱子殿
金壹圓	伊藤藤吉殿
金壹圓	奥山藤三郎殿
金壹圓	志田艮子殿
金壹圓	寺尾秀子殿
金壹圓	小杉菅子殿
金壹圓	小田川勇子殿
金壹圓	中島小春子殿
金壹圓	宮崎八百吉殿
金壹圓	間宮濱子殿
金壹圓	滿川まさ子殿
金壹圓	落合あい子殿
金壹圓	伊藤爲吉夫人殿
金壹圓	窪田なか殿
金壹圓	潮田ちせ子殿
金壹圓	小牧哲子殿

女學雜誌

第四百貳拾五號

明治二十九年八月二十五日發兌

社説

家庭亂

家庭に亂あるは、猶ほ國家に亂あるが如し。而も、亂の人々を困しむるとの太甚しきや、國家の亂の大なるも尙ほ能く家庭の亂の小なるに及かず、家庭亂の戰場は狹隘にして、砲彈劍戟の響も高からず、史家其の作戰景狀を筆して世に示すとあらざれば、人大方は其の激烈なるとを覺らず。沈々たる夜陰、無名の打死者ありて、暗涙默叫は空しく消滅す。嗚呼、誰か、其の犧牲に涙を灑ぎて、其の無告の怨鬼に一片の香華を奠するものぞ。

家庭に在ては、尤とも多く困しむもの、尤とも深く戚くす。最上の愼しみあるもの、最愚の狀を呈はす。民權を訴ふるにあらず、彈劾を奏するにあらず、闇として聲を飮むの人、即はち是れ最上の能辯なり。古來、此の所ろに幾何の大犧牲、幾何の大慈善かありし。既に、犧牲と慈善とあり、之に對して何等の壓制、何等の慘酷、何等の陰險かありし。吾人、一夜舊屋の障壁に對坐し、想念を結んで熟々多年の經歷を思へば、無色の土、無紋の紙も尙ほ淋漓たる血痕を印して、妖鬱たる鬼氣の尙ほ慘たるを見めす。聞けよ、無名の鬼、天下の善戰に如此く善なるはあらざりし。徐むろに慰藉を開陳して其靈に告げん、冀はくは享けよと。

惟んみるに、家庭の亂は、天下の亂に先後す。即はち、其亂の天下に影響を與へざるはなし。天下亂れて稍や治まり、大勢移渡の機會に際するや、玆に家庭亂あり。家庭の亂激烈、其子亦激烈の餘韻を鳴らすや、玆に天下の亂あり。昔し、某は天津橋上に杜鵑を聽きて亂兆を卜せしが、吾人は寧ろ家庭の音調に將來を占はんとす。

觀ずるに今は是れ邦家の亂後を嗣ぎて、時勢の過渡に際會せり。路上に參伍錯雜せる異樣雜多の種類は、一ッに家庭裡に

混淆して、共もに其の種芽を抽く。東洋風あり、西洋風あり、復古風あり、維新風あり、守舊風あり、改革風あり、異風同じく吹き雜つて狹隘なる家庭裡に往來す。其の衝突混雜の躰、容易く名狀すべけんや。叱咤あり、不平あり、怨恨あり、失望あり、悶死ある、抑そも先づ此等の事情あるが爲めに因緣せざるはなし。

且夫れ、過渡の制裁は極めて薄弱なり。是れ舊習既に破れ、新習未だ熟せず、人々放逸して隨意に處置するに由る。此を以て過渡時代の道德は常に太はだ下品なり。看よ、今の家庭の如何に墮落せるかを。親子の情義妙ならず、同胞の友愛切ならず、主僕の關係嚴そかならず。尙且つ醜態の人を白晝、家庭に混じて而かも其の神聖を汚がすことを奇しまざるものあり。近來、蓄妾の弊風の士君子間に行はるることの多きや、實に驚ろく可きものある也。

凡そ極端なる厭世家は、家庭の不調和によつて養育せらる。冷酷無情の哲學者は、家庭の冷やかなるにあつて養成せらる。社會黨、虛無黨の卵子を、啻に政弊の生む所ろと做すは誤まれり。人の子の皆な家庭によつて養はるるが如く、惣ての激

調異種の子は、悉とく其の氣稟を家庭の亂によつて享けざるは無き也。

吾人今の上流社會の家庭を看て、其末路の狀態を想像するに難んぜず。其の腐敗の著明なると共に、其の傳染の莫大ならんことを察す。然れど、中流社會にして尙ほ健在せば、邦家の前途多望なるべきに、悲しむべし、中流社會亦た剛健質實の氣韻を欠き、其家庭は等しく亂離の中に沈淪せり。不潔、虛僞、爭鬪の家庭の裡に、何の善き者出んや。蓄妾の家に貞操の子を求め、虛僞の家に眞面目の子を求め、爭鬪の家に忠愛熱情の子を求めて、安くんぞ得んや。知るべし、將來の中等社會前途の行動を。現に如今の家庭に就きて將然の大勢を示めす、豈に不當なりとせんや。

然れど、亂世の世に毒して亦た世に益する如く、家庭亂の亦た家に災して而も之を福にすることなきに非ず。其の飜轉の機は一に當局の人に掛る。國亂れて忠臣あり、家破れて貞婦あり。家庭の亂は、即ち女性尤とも獻性すべきの秋にあらずや。家庭の亂の複雜にして治めがたきは、天下の亂の複雜にして治めがたきよりも尙ほ難し。識者夙に之を看破す。家庭亂裏

の人情は、人情衝突の一大事機なり、之に處するは、只正大非凡の決意を以てして初めて能く了すべき也。故に方今の危機に際して唯一の賴よりとするは、只但だ家庭に賢婦烈女の存在せんと是のみ。もし其の獻身の誠を以て、貞愛の情に和し、一身を擲うつて全家の衆恐衆怨を買ひ、心血を吐き盡して貞潔の氣を一事一故の中に印刻するに及べば、希はくは其の禍を轉じて祝福となさん哉。蓋し若し現時の家庭を放擲して其の行く所ろに任せなば、前程察し易く、末路既に明らか也。將來の日本を奈何んせんや。獨り之を救ふもの、則ち婦女子たるとを覺らば、女性の責任も亦た重大ならずや。

いかにせんかげをば袖にやどせども
　心のすめば月のくもるを
行方なく月に心のすみ〳〵て
　はてはいかにかならんとすらん
もろともにかげをならぶる人もあれや
　月のもりくる笹のいほりに

女學

女學教師清俗の感

（上）

敎育に於て當世の喝采を博せんとするには、自から其の方策あり。些こしく才識ある者は、之を辨知すると決して難きに非らず。少らく、女子敎育の事に於て其の一二を言はんか。先以て當世中等社會の好尙を觀察し、其の輿論と流行とを吟味し、可成く圓滿巧妙に此等の所望と調和する樣、女生を敎練するを秘訣とす。

蓋し、今の紳士學者は、槪して婦女子に獨立心あるを好まず。何事にても男子に委賴して、寧ろ之に隷屬するをもて愉快となす。彼等が文章に書き演說に談話する時などは、巧みに高尙なる理想婦人を畵きて、之に毅然たる精神を附することを樂しめども、理想と實際とは總べて併行せざるものなれば、彌よ我が内君を定むる時節に到れば、葉公が眞龍に驚ろくの

躰裁にて、屢に理想として賞揚せしものを反つて究竟となし、寧ろ只だ我が自由になり我氣樂になるべきものを擇ぶは、凡俗人情の常也。

夫れ、非常の覺悟は只だ非常の場合に効力あり、通常には餘まり其用を見ざるものなれば、尋常人が此の稀なる覺悟を平生に洞察し賞美して、其戀思の目的となすとなどは、實際に於て餘り多からざる所とす。故に、普通の男子が普通に好樂する資格は左程大業のものにあらず。極めて卑近平凡にして申さば日常居動の介抱に忠義なる如きを第一に要求するもの也。故に、控え目にして出射張らず、無口にして面白く、氣が利きて利怜ぶらず、只だ唯だ乃公を天とし君として毫末も逆らはず、万事唯々として身の廻りの用事を敏活周密に世話しくれるを以て最大要件となす。家に歸れば、靴を脱がせ、室に入つては着物を脱がせ、座しては足袋を脱がせ、一顧すれば茶を献じ、一咳すれば灰吹を捧げ、寢轉べば枕を持參し、眠ればソツト夜着を着せ、御寢の中は閉息して呼吸を低くし、覺め玉へは直ちに顔洗を持參する迄に氣が利かば、乃公の滿足天に達すと云ふべし。

古人曰く、大禮は大義を守るにありと。左れど、人大義を守るときは、大率ね通俗には擯斥せらるゝ者にて、凡て尋常世人に受の好き禮道とは、起坐進退の調子を美しくし、物言ひを圓ろく、取なしを温和なしく、所作風りを優美にするとにある者ゆゑ、女子生平の禮儀に重んずる所は、極めて小儀小禮とも言ふべき極々卑近の邊にあり。故に尤とも多く此邊に心を注がざれば、普通人の好みに應じて其の賞賛を得んとは難し。然し乍ら、今の紳士學者は、大抵成り上りものにて、其の素性の上品なるものは餘り多からず。よし、元來は上品のものなりとも、一と度び書生の生涯を送り、若くは、方今無禮講的交際を立身の秘訣とする仲間に出世したる人々に於ては、所云ゆる小笠原流の女禮を究竟に思ひ、昔し怪しげなる所より一轉玉の輿に乘りたる今の上流貴婦人の所置風を目撃して、我妻にも是に倣はせたしと思ふの意あり。故に、今の女子たるものは、一面、小禮小儀に注意して、極めて些細なる所ろに粉飾するの心掛あると共に、滑然洒落、融通自在にして、あまりに折目正しき究竟の躰に陷いらざるの用心を肝要とすと言ふもの多し。

源氏物語作者は、其博學を人前に露はさゞりしとて模範にせられ、六十年前西洋に於て初めて女子敎育論を作せし女秀才は、其の學問を人に示さゞるをもて一の心得とせしが、今は即ち然る掛念決して無しなど言ふは書生論なり。女が學問を人に見せるは、惣べて尚ほ人の嫌を受く、所云ゆる微笑を暗示して簾を揚ぐるの愼しみにて、さすがに晴がましく進みもせず、さりとて棄てもせず、知るにもあらず知らぬにもあらぬ奥床しき風采にせざれば、方今の人士に好まるゝヿ能はず、無學にして卑劣なる男子が揚々として生意氣の言論を吐き、又は、淫猥淺陋の小丈夫が無禮なる談話を喋々する時にても、直ちに之を鎗込むるなどは、亞米利加婦人の特權として、吾國の婦人は勘辨辛棒せざる可らず。學を隱くし、才を隱くし、意地を隱くし、氣力を隱さゞれば、則ち今の男子の好みに適ひがたきと謂ふ。

更に一つの要件は、妻たるものは儉約して我儘を言はず、而も婚姻の時は、可成く多く持參金を携へざる可らず。今日の紳士學者にして、財婚に眩せざるもの極めて少なし。其の婚姻披露の案内狀に迄で、何々銀行頭取の娘、又は何位何爵某の何女などと書くを名譽とし、人も亦た責めざるが如し。堂々たる知名の博士學士にして、商人の娘を生命の如く懇望し、又は大臣の落し胤とか云へるものを頂戴し、頗ぶる得意がるものもあり。故に、今の女子は、儉約の德と持參金とを、其の必らず携帶すべき最大要品とせざる可らず。

右の如く列擧し來れば、殆んど際限なし。左れど、猫の尾毛を見れば、其の全躰は虎よりも小さきヿを判別せんは難からず。以上三四の畧言によりて、方今所云ゆる中等上等の男子が好尙趣味の一斑を推諒するヿを得べし。左らば、此等社會の喝采を博し、其の珍重賞贊を辱くすべき程に今の女性を敎練せんには、自ら之に相當せる敎育術なかる可らざる也。

(中)

翻つて、今の女子敎育家中の精神家、靈性家をもて任ずる士人、もしくは、歐米舶來の思想を純粹に發揮する士人の盛んに氣焔を吐くを見よ。

男女素と同等にして、互ひに敬意を表せざる可らず。人の上に人なきが如く、人の下に人なし。夫婦均一の權利を所有して、相互ひに下らざるに至り、初めて眞正の夫婦あるべし。

女子にしてもし獨立心なくんば、何によりて其良人を助けんや。非常の覺悟決心だに備具せば、他の小事は暫らく問はざるも可なり。禮は固より肝要なりと雖ども、少女を餘り早く究屈にするときは、其發達を中止するの害あり。暴りに其外面に制裁を加はふるときは、修飾僞善の惡德を養生すべし。寧ろ暫らく天眞爛漫の開花に任せ、季到り時來りて徐々として自然の修練を自得せしむるに及かず。古老俗輩の一評は、顧みるに足らんや、要とする所は、永久長遠の發達如何んと言ふにある耳と。其議論堂々、眞に盛んなりと言ふべし。左れど、如此き大言壯語の敎育者は、嘗て自身の愛孃を育て、其年頃の風儀に心配し、其の出世の成行に掛念し、其の世評の善惡に痛慮したることありや否や。是れ、第一に問はざる可らざるの疑點とす。人の愛孃を傍觀して一種無責任の地位に立ち、世間の風評が女性終身の運命に及ぼす影響を仔細に慮ばかることもなく、垢なきものは遂に明白となるべし、善きものは遂に賞賛せらるべしなどの理論によりて自得するは、豈に人の子女を愛護する者の衷情ならんや。又たとひ西洋文明國の風儀は眞に開化したるものとするも、方今未だ其地位に進まず、國風の交際未だ其如くならざるの當世に於て、凡俗普通の女生を驅つて惣べて其の未來の風習に感染せしめ、時ならざるに春を慕ひ、今年の中に花の咲かざるを怨望するに至らしむるは、眞に女性改進の友を以て任ずるものの慈悲ならんや。小進步、小改革は、惣て新らしき者の皆な爲す所なれども、目立ちたる改革を了して、一段の進步を促がす如き大任に當るものは、百千人にして僅々二三人ある耳。他は大凡の平安と、一種の進步と、健全なる同化力とを得せしめて、以て安樂に一世を經過せしめ、平和に一家を內助せしむるの素養を與ふるの外ある可らず。

（下）

然りと雖ども、學校數年の生涯に於て、點數多く、缺典少く、首尾よく卒業の關門を通過せしめて、其の當坐、父兄親戚鄉黨人などの賛歎を博取せしむるのみが、敎育者の希望にあらず。學窓敎育の眞價値は、卒業出門の後ち二三年にして漸やく其の效驗を奏し初むるを善しとす。彼の卒業試驗に滿點を博し、錦衣鄉里に歸るとき、如才なしとて喝采せらるる程なりとも、一度び世の風波にもまれ、家庭の實際に苦辛し、人

世實地の冷遇に遭會して、艶花忽ち萎ほれ、氣力直ちに挫け、風采容易に一變して、頓に昔日の抱負を失ひ、毫も無學の婦人に異ならざるのみか、其の昔に忍び、心に恥ぢつゝ、遅疑として恐る〳〵事に當るの躰裁は、反つて世の無學婦人が一種の勇氣あるにすら及ばざるに至らんか。これ女學校敎育の無効力を示めして、一時の粉飾修養の虚僞を罰したるものと云ふべし。苟くも、女學を以て任ずるの士、遂に如此き淺輕の處置に安んずべけんや。

敎育者冲々たる苦心の裏に、女生終身の發達如何んと云ふの題目存することなくんば、未だ敎育の大義を盡すと言ふ可らず。

然れども、人の運命の造次に遷轉し、進退起伏の極めて些細なる事柄によりて支配せらるゝことを、知らんものは、女生が永遠の幸福を期すると共に、其の卑近目前の平安にも亦た熱心せざる可らず。わきて、人の口の葉の風に飛ばされ、一小波瀾の動搖にも沈沒し易きは、今の人世が逆遇する女性と云ふ小さき船の成行にてあるなれ。心あり慈悲あらん人、何ぞ冷やかなる理義と、隔たりたる希望とによりて、其の當座の困究を放却すべきならんや。

惟ふに、束縛の中に自由を得させ、規律の下に獨立を覺らせ、形式儀文の間だに綽々たる發達を遂げしむるの工夫は別に自から存するあつて昭らか也。何となれば、自由、獨立、及び發達の成効は、旨として心裏主觀の上の修養に屬し、必らずしも有形物の束縛によりて妨害支障せらるべきものにあらざれば也。手腕あり、覺悟ある敎育者にして、一面、嚴然たる規律儀文を布き、一面綽々たる自由境を開展し、以て女生終身の大發達を遂げしむべき端緒を啓くと共に、其の當世凡俗の人に擯斥せられざる常識常徳を得せしむることを勉强せば、豈に其の効を奏しがたしと言はんや。同志人須からく之を試むべき也。

俗に所謂ゆる食ひ合して悪しきもの：：：浅田宗伯

鰻に梅干、生玉子にトコロテン、西瓜に熊の膽、熊の膽に數の子、生梅に黒砂糖、キウリにコンニャク、そばに田螺、焼酎に梅干、ふぐに酢、蟹に氷り、蟹に椎茸、からしに春菊、薩摩芋にからし、牛肉に栗餅、饂飩になつめ、すもゝに鮒、鰡にまくはうり、蛤に唐もろこし

又喰ひ合して忽ち病を起すもの

蝦にキノコ：：煎豆に蟹：：是は屹度肺病だ○さばに芋がら：：是は眼病だ○かぼちやとトコロテン：：早速胃病だ○桃に數の子：：怖ひぜ癩病だ○鹽魚に唐辛し：：痔が起る○蛸にあさづけ：：スグ腹いたい○あわびに生梅：：ろふがいだ○天ぷらにキノコ：：いやだ中風だ○蟹に酢の物：：疝氣○田螺に松蕈：：癪○梨に蜜柑：：むし齒

ストウ夫人が半面の歴史

（アンクル、トムス、ケビンの來歴）

同情博愛の人あり、其が胸間に、至誠熱情の湧躍する處、天來の啓示に契合する處、忽ち一枝の筆端より迸り出で、凝りて千古の大文章となり、自ら期せし處多からずして、而も之が爲めに、甚しく天下人士の良心を衝動刺戟し、仁義博愛をして、世に打ち勝たしむるに預りて、偉大の勢力ありしもの、十九世紀の文壇、實に『アンクル、トムス、ケビン』を以て其最とす。著者は誰も知る、其名は米國人民の誇りとなり、又天下女流の榮譽たる、ハリエット、ビーチャル、ストウ夫人、夫人が長壽の生涯、今は本年六月十四日を以て、正に名譽ある八十有五年の高齢に達したる後、日を過ぐる十七日、時に七月一日に至りて、此博愛慈善なる奴隷解放の福音の宣傳者は、此世の讃美すべき生涯も、安らかに其終りを告げて、天上無窮の安息に入らんが爲めに、彼白雲の郷に迎へられて逝き其賦命の偉業は、既に三十餘年の昔に、其果の結ばれたるを見て、餘年を多福平和の裡に送りつゝありし、ハードフオルドの家園は、夫人永く之を辭しぬ。吁今や十九世紀文壇の名物は、此塵土を去りてあらず、訃音一たび傳はるや、之が爲に悼戚の哀情を禁ぜざりしもの、地上東西果して幾許人ぞ。幾許の士女は必ずや、爰に熱情を以て、今更に夫人が熱血至誠を以て社會に産み出したる、其『アンクル、トムス、ケビン』を慟きけん。實にや夫人今は彼天國に在りと雖も、此世界に遺せる此書は、永遠にそが博愛慈善の福音を傳へて、多くの仁心義念を醒起するなり。『アンクル、トムス、ケビン』の歴史は即ち、ハリエット、ビーチャー、ストウ夫人が一生の歴史の半面をなせり。而して其働の半面の歴史たる、夫人が孝女、貞妻、賢母としての。人生稀に受くる八十餘年の長生涯も、隠れて顯れざる婦人が生涯の常なるが如くに、多くの變化なく、多くの奇異なく、されば此半面に於て、夫人が歴史の世に傳へらるべきものは甚だ尠かるべきあり。然れども彼半面の歴史たるや、是れ米國の爲めに、一新時代を開元するに預りて、巾幗の身、其纖手の筆先を揮ふの功績は頗る偉に、其歴史は、彼國社會の歴史よりして除くべからざるのものにして、即ち夫人自から世に傳稱せらるべき歴史も亦實に是なり。されば夫人が光榮なるビーチャー家に生れ、高名不朽なるライマン、ビーチャー博士を父とし、また三寸の舌頭に、活火を燃やし、熱血を沸して、正義人道を唱説し、奴隷解放を絶叫し、青年子弟を教化して以て、天下の良心を煽動せしめ、爰に講壇の英傑てふ偉名の、万古に芳しき、彼ヘンリー、ウオード、ビーチャーを兄とし、またストウ教授に嫁して、貞妻たり、また賢母たりし隠れたるの來歴は、暫く之をさし措きつ。今は夫人が熱誠の精神の、永遠の生命を托しつゝ、其功績著大なる、彼小説の來歴を記さん。夫人の訃音聞ゆるの昨今、之を繰返すは、頗る其時の宜しきを傳へ、また夫人長逝を悼むる切情を慰かんと、之に過ぎたるはなからん。

夫人幼少にして既に、慈悲仁愛の精神に滿てりしとは、ビーチャー氏家道の存する處の、專ら世に人道を教へ、已に之を行ふことにてありしを知らば以て推せらるゝに餘りあり。彼大著作の精神の由來、當年に溯りて之を尋ることを得ん。其天緣のレーン神學校教授ストウ博士に結ばゝれて、シンシナチ市に居住するに至りしや、其頃米國々民が、自由を愛すると稱しつゝ、其咀たり、其罪たりし、黒奴虐待の慘狀は、北方諸州の早く之に免かれたりしも、南方諸州は頑として、未だ其非を悟らず、而して今ストウ夫人等の住へるオハイヨ州は、隣州に未た奴隷を廢止せざりしケンタッキーを控へしものから、日夜見聞する酷虐の慘狀、夫人が同情の絃線を鳴動し、人情の深宮を衝動すると甚た多く、後日の大小説を搆ふるの材料は、此際時々刻々に供せられたりき。

ストウ氏がレーン神學校の校邸は、屢々瀕死の危險に襲はれつゝありし奴隷の隠場となりき。而して常に家族の者等は、寝るに武器を枕とし、傍らに大鐘を懸け、若し事あらば之を打鳴らして、隣處の校舍内なる青年學生の援助を乞ふの備へをなしたり。如斯きは決して虚に備ふるものに非ずして、奴隷廢止を不利とする徒が、不良の徒を教唆して暴擧を廢奴隷論者に加ふると、決して稀ならず、其種の暴徒が、憤怒の勢に乘じて生徒の大多數の廢奴隷論者なるレーン神學校をして一杯の焦土に化せしめんと企つことさへ多時なりしも、たゞ此校の市街を隔つると二里而も道泥濘を極めたる丘山に在るが爲めに、僅に其大危厄に免ることを得たりしのみ。

またストゥ夫人は其小兒等の爲めに、家學を設けたりしに、其近隣には自由黑人の小兒輩の簇々群を成すもの、未だ學を受くるの場處を有せざりしを見て、慈善の情彼等に其家學の益を受くるの便利を供したり。就學する黑人小兒中、一人尤も俊邁快活なるものありき。然るに其母一日此兒を尋ね來りて、ストゥ夫人に告ぐるに、此兒未だ全く自由を獲ると能はずして、ケンタッキーなる某が、分散財產中の一品なりと聞きて、夫人が驚愕一方ならず、其小兒は遂に其分財管理人の一人に率連れられ行きて、市場に執達吏の爲めに競賣に附せられたり。酸鼻に堪へざる出來事に、隣人等愍然の情を致して、醵金して此兒を購ひ返したりとはいへ、此慘事はいたくストゥ夫人が心を打ちて、深く悲痛の情を留めたりとなん。此頃博士ベイレー氏、シンシンナチ市に來り、奴隸廢止主義なる一新聞を發行す、此人賢才、情に溫に、義に勵み、雄辯能文の士なりしが、天定つて未た人に勝たずんば、義、不義に妨げられ、道、非道に塞がる。ベイレー博士が慈善の事業は、ケンタッキー州の奴隸主人等が教唆引率する暴徒の爲めに、一度ならず二度までも其新聞社に襲擊せられて、其印刷器械は破壞せられ、活字はオハイヨ河滔々たる水流に投入されき。かゝる暴民の騷亂ありしが爲め、同情此人の上に集まらざるのみか、却て市民の嫌忌する處となり、ベイレー博士の、隣州人民を憤激せしむるは、甚だ宜しからずとして、非難するの聲、教會に政廳に屢々聞きたりき。而して彼暴民輩の擧動の亂暴無情を極むるや、自由の黑人等とも、之を見れば威嚇し、虐待して、之に遁るゝと、生命も辛々の業なりき。また良家の從僕たる身の黑人にても、黑人とさへあれば、其主人の邸宅までも驅逐し來り、主人も稍くに其僕を助くるとあり。其頃名高き談に、一人の年少なる婦人ありて、其黑人なる從者の危難を救はんが爲めに、閾(しきみ)につき立ち拳銃(ピストル)を握(にぎ)り、眦(まなじり)を决して、暴徒を睨まへ、假令已れ死すとも、彼等の足をして戶內に向けしめじ、之を敢てせんとせば先づ我が死體を蹈むべしと叱して、流石の暴徒を辟易せしめたるとありしといふ。偖て彼ベイレー氏は四面敵を受けて、遂に耐ふると能はざるに至り、殊に保安の職に在るものさへ、氏が危難を棄てゝ顧みず、却て去り行けがしにいはぬ計りなりければ、詮方なくて、首政府保護の下に華盛頓府に移りて、『ナショナル、イラア』と名つくる週刊雜誌を發行するに至りたりき。此雜誌にては、即ち『アンクル、トムス、ケビン』が出りて以て始めて世に顯はれたるものなりけれ。

ラブジョイ氏の運命に至りては、實に悲痛の極なりき。此人イリノイス州アルトン市にて、廢奴隸主義の新誌發行に預り居りしに、ミッソリー州より襲來したる暴徒は、彼が家を火にし、彼をも射殺したり。同時に、此ラブジョイ氏と事を共にしたりし、ストゥ夫人の兄弟の一人、エドワード、ビーチャー氏も刺殺の悲運を了りたりとの慘報、其一家人の鼓膜を破りて傳はり、涙堤の暴流は、决して永遠にこの悲痛を除くと能はざりき。此時に當りてや、正義を愛し、人道を求むるの人は、是が爲めに貴き價を拂つて、幾許の苦痛困厄を購ふべかりしなり。レーン學校にケンタッキー州の一青年、名をジョン、ジー、フヒーと呼べるありき。彼は正義の良心に訴へて、其奴隸を放ち、自州に歸りて奴隸解放の福音を宣傳せんと企てしが爲め、其州よりは追放の罰を受け、其父よりは相續權を奪はれたりき。然れども英意屈せず、彼が創立に係り、白人黑人共に教育するのベレア大學は、今日其盛なるを致して、彼が堅志耐忍によりて獲たる勝利の紀念をなせり。多年オハイヨ州居住の後、ストゥ夫人は去りて新英州の生涯に入りし後とても、奴隸使役の慘狀痛事を見聞すると日々に其多きを加へ、此地方に於ても禁奴隸論者は、勢力實に微々振はず。黑人奴隸の使役は、立法の許容する處、敢て之に反對せんは、合衆諸邦の聯合をして、危殆に陷らしむるものと信じ、仁慈を旨とせる基督教徒さへも之が爲に其目を蔽ひ、其耳を塞ぎ、其心を頑にして、却て一死以て自由を購はんとして北方州に遁れ來る可憐の奴隸を捉へて、之を其殘忍なる主人に引渡すの勞に忍べる事さへ多かりき。如斯く悲慘痛嘆に堪へず、憂憤慷慨すべき無數の出來事は、當年の米國天地を暗淡晦澁ならしめて、凡人未だ其非を悟らざりしも、洵に仁義博愛の念に富たりしものは、此際國家の爲め、人道の爲め、誰かは其慈心を煥發せざりけん。ストゥ夫人の如きは、世人の未だ奴隸使役の慘害の邪計なるかを知らざるを憂ひ、冀くは之に指示する處あらんと欲して、こは實に『アンクル、トムス、ケビン』の大著あるの因緣をなせり。著作の由來頗る深し、豈に筆路漫然として動き出でしものならんや。

此希望を抱きて、既に與へられたる無量の材料に、万斛の熱涙を絞りて、考案百方、今は一のインスピレーションの天來するものあるを俟ちしとき、一日不圖一冊のナショナル、イラーを讀過するの際。眼は忽ち一くだりの、まとに哀れむべき物語に、潸然として淚を灑ぎぬ。その話は一人の黑人の女が、其子と共にケン

タツキー州を遁れ出でゝ、オハイヨ河流の氷上に、死生の運命を試みたる事にて、この女を其厄難に救ひ上げたる實見者の記述する處なりき。此一條の談柄は、夫人に與ふるに第一の刺戟を以てし、更に考案を廻らすの際、曩にオハイヨ州に在りし頃、先に奴隷の身なりしに、いまは自由を獲て、我家に奉仕する一黑女の爲めに、曩ケンタツキー州に奴隷の悲境に在る其の夫に送るの書簡を認め遣はせしが、其夫といへるは、正直勤勉の黑奴にして、其主人が、自由を與ふるとの約束を遷延猶豫して、いつ實行すとも覺束なかりしにも拘らず、毫も恨怨するの色なく、ケンタツキー、オハイヨ兩州間に、自在に往き來しつゝありしも、逃避を企つるやうの事はなく、奉公他意なかりしものなりし、其黑奴の事を思ひ出でゝ、爰に夫人が小說の主人公なる、アンクル、トムの理想的人物を描くの根底をなせり。

ストウ夫人が第一に書き出したるは、今は小說の結尾をなせる、トムが瀕死の光景なりき。夫人一日、とある教會に列席し、參衆と聖餐を頒ちつゝありし際、此光景の想像、胸中に脉々として湧出し、幻像心裡に影を投じて、自ら其幻像裡の人たるが如くに感じ、其想感に全く打たれて、血沸き、涙流れ、慄然として歔欷するとやゝ暫し、想感の禁ずる能はざる處、馳せて家に歸りしや否や、筆を執りて、其想像せるものを描きて、夫ストウ博士の會々不在なりしより、其子の長は十二歲、幼は十歲なるものに、之を讀み聞かせしに、二人の幼兒は、いたく之に感動し、すゝり上げて泣きつゝ、其一人の、叫びいへりしやう『母君奴隸を使役するは、世の中の尤も惡き事ならずや』と、先づ其幼兒を動かしたる、至誠凝るの著作は、遂に天下を動かすの勢力とはなれりけり。豐けきインスピレーションは此刹那に夫人が上に下り來りて、其時よりして、夫人筆を執るに、千言万句も立處に成り、其狀は眞に文字を播ふるものゝ如くならずして、其筆端は、恰も認識するに難き冥力によりて動かされつゝあるものゝ如く。光景、談柄、會話は、滾々として湧き出づるが如く、之を制する能はざる許なりしとぞ、二三篇既に成りし後、書をベイレー博士に裁して、彼が雜誌に掲載するを求めて、これより直に毎週一回の寄稿をなし始めたり。當時のストウ夫人、年四十、其身の上といへば、乳兒のありしなり、其小兒と共に家學に集へて教育しつゝありし幾許の生徒のありしなり、かてゝ加へて物馴れぬ僕婢の上には、毫も目を放つと能はざりしも、其著作は此時夫人が爲めには、此世の何等の勤めよりも、尤も大切なるものと感ぜられしかば、毎週の寄稿は一回も之を缺かせしとなく、而して日夜其胸底に蟠屈鬱積せる思想は、其形ちを取らんが爲めに、僅に數分時間を要するのみなりしとぞ。偖て其原稿の成る毎に、先づ之を家族の一同に讀み聞かせ、興趣を催したる後に、置郵するを例となしたり。扨てまた單に悲慘なる奴隸の狀態をのみ描かんとは、人をして讀むに堪へざらしめて、之を顧みるものなかるべきを知りて、夫人は其豐贍なる才藻と、多次の實驗とに訴へて、やゝ平和愉快なる奴隸の境遇をも描き滑稽戲謔を交へて、暗中に光明を示し、悲痛を色どるに可笑を以てしたり。

『ナショナル、イラー』誌上、此小說は篇を重ぬると、稍くに多く、益々佳境に入りし頃、ボストン府の出版業者ジュウエットなるもの、結了の後は之を一卷の書冊となして出版せんと申し出でゝ、夫人も之を承諾せしが、程經て篇數いよいよ重なるまゝに、出板者は夫人に書して、一冊の讀物としては、あまり長きに過ぐるとともならば迷惑なり、元來人の好まぬ筋の小說故、一小册子の短篇物ならば、或は實行の途もあらんかなれど、はや二冊ともならば、到底失敗を免かれざるべしと告げたり。夫人これに答へていひけらく、已れは小說を結搆するものに非ずして、小說自ら己が結構をなしつゝあるなれば、自然に完結に達せんまでは如何ともなし難しと。夫人の筆路進むと共に、熱情いよ〳〵加はり、アングル、トムの死期の慘狀を描いて、小說も其結局を見し折りには、夫人は今まで己が上に加はり居りし冥力の忽ちに消散せしが如くに感ぜしとぞ。扨て爰に夫人が心血を絞りたるの大著作は成就せり。而して杞憂は忽ち夫人に來りて、此書果して世に讀まるべきや、幾多の奴隸が泣き叫び訴ふるの聲の、哀々として聞ゆるものだに、顧るものとへなきに、我物語の人心を動かすに至るべきかと、多くの配慮は夫人の上に繫がりき。されど版成るや、其兄ヘンリーが、リバープールに赴きて、英國人民の米國南州を唆して、奴隸廢止に反對せしむるの不義非道を痛言熱罵したるに似たるの意氣を以てか、直に英國皇太子アルバート親王、マコーレー、ディケンス、キングスレーの三文豪及びカーライル侯に書を附して、各其一部を送附したり。

千八百五十二年三月二十日、『アンクル、トムス、ケビン』の第一版は出版せられ

たり。夫人收めたるの原稿料此時三百弗なりしさぞ。既に版は成れり、また讀者なきを憂い、全く反對の成績あるを見て消え失せぬ。日ならずして一万部盡き、一年にして三十万部盡き、日夜大印刷機械を運轉して、其印刷に隙なかりしさ雖も、供給は常に需要に負けりしさぞ。かくて彼處にも此處にも多くの讀者を獲て、ストゥ夫人は忽ちにして全國に反響し渡れる同情の聲を聞くに至り、夫人が心懷に鬱堆せし義憤、悲嘆、愍情は、去りて讀者の心懷に移り行けり。一册の『アンクル、トムス、ケビン』は、幾許の奴隷癈止論者を起しつゝありしをなれば、幾千万卷の此書の如何に正義人道の福音を天下に唱道せしをよ。宜なり、曩には勢力微弱振はざりし奴隷癈止論者、此書出版以來急速に强勢を養ひたりしをや。リンコルンありさ雖も、グランド將軍ありさ雖も、ビーチヤーありさ雖も、もし『アンクル、トムス、ケビン』なかりけんには、彼南北戰爭の結果なるもの、勝星果して北方の天に懸るや否や、多くは知るべからざりしなり。南軍の主將リー將軍が、矢折れ力竭きて、流石當代の名將も、アポマトクスに來り、冑を脱き劍を投して北軍の軍門に名譽の降服を乞ひし時、軍中喊聲あり曰く『ハリエット、ビーチヤー、ストゥ夫人万歳』さ。また其時南軍の一將あり、人に告げて曰く、『リー將軍は、グランド將軍に降服するものに非ずして、ハリエット、ビーチヤー、ストゥ夫人に心服したるなり』さいひしさかや。婦人の纎手さいへども、天啓を蒙り、熱誠に動きて、一枝の筆に訴ふるの力、また强大なりさいふべし。米國の今日、彼痛むべく惡むべき、殘忍の咀ひより免れて、万民共に自由の空氣を吸呼するを得るの恩德、往いて彼リンコルン、グランドに謳歌すべくんば、我ストゥ夫人は更に讃美せらるべきなり。

此書たゞに米國の奴隷を自由ならしめたるのみならず、傳はりて外部諸州に往けば、往く處さして、士女が慈悲仁愛の眞心を喚起して、この慈善の福音は尊重せられ、是が爲に、奴隷を解放するに至りしものゝ例は、亦敢て尠しさせず。世界の諸方より集り來る、多くの感謝賛嘆狀は、常にストゥ夫人の膝前に堆く、英國のシヤフッベリー侯は、ストゥ夫人を生ドたる米國の女流に感謝せんさして、彼れの感謝狀に同意連署するの英國人、國内は素よりの事、大陸諸國果てはエルサレム地方に散居せるものまでに及んで、頗る多く、其狀はストゥ夫人の許に送られたりき。また其國のスザランド公爵夫人の、『鞭で打ち碎かるべき鐵鎖の紀念さして』さ稱して、奴隷の手枷を眞似たる黄金の腕輪を贈れるありき。然れども多くの黑人が、屢々夫人に告げて『此書の著述ありし以來、世人は皆我等に好意を表し、我等は到る處に友を得、人皆如斯く我等に親切なるを不思議なる次第なり。』さいへりしをは、尤も夫人の心に叶ひて、巧言諛辭に勝るを万々なるの謝辭にして、更に又合衆諸國に奴隷を禁止するの憲法修正は、ストゥ夫人が獲たる最大の報酬なりけり。

『アンクル、トムス、ケビン』出でゝより、諸國の言語に飜譯せられ、其他演劇に上さるゝあり、歌謠さして歌はるゝあり。英國博物館長ワット氏は、原語譯語共に此書の異種類たるものを蒐集して、今其館内に藏めらるゝもの左の如しさいふ。

◎原語に係るもの。

完本　三十五種版

鈔畧したるもの、または其脚色採用したる戯曲、歌謠等　八種

◎外國語の飜譯、鈔譯、應用に係るもの。

アルメニアン語一種○ボヘミヤン語一種○丁抹語二種○和蘭語一種○芬蘭語一種○フランダー語一種○佛蘭語八種、外に戯曲二種○獨乙語五種、外に鈔譯四種○匈牙利語一種、外に小兒用一種、押韻抄譯一種○アイリリアン語二種○以太利語一種○波蘭語二種○葡萄牙語一種○近世希臘語一種○晉西亞語二種○西班牙語六種○瑞典語一種○ワラムアン語二種○ウエールス語三種

◎『アンクル、トムス、ケビン』參考書。

英語三種○佛語二種○獨語一種○西班牙語一種

◎雜誌新聞に見えたる此書の評論等、

英吉利にて三十一種内七種ウエールス語○米國にて六種○十二種外國語

而して、なほ英國博物館の藏書に洩れたるもの、また多く。次に其種類を擧ぐ

◎外國語の飜譯

ボヘミヤン語一種○和蘭語二種○佛蘭西語五種外に戯曲一種、歌謠一種○獨乙語四種○以太利語一種○晉西亞語三種外に抄譯一種○セルビアン語一種○瑞典語參考書飜譯一種

如斯くに多くの言語を通ドて、此偉勳ある大小說は、天下に仁義博愛の人道を唱道しつゝあり、假令米國は既に三十有余年の昔に、奴隷解放の美擧を遂げたりさいふさ雖も、此書の人心に及ばす勢力は千載渝るべきに非ざるなり。敢て再び言はん、ハリエット、ビーチヤー、ストゥ夫人、今や逝いて崼しさいふさ雖も、其心血を以て生める『アンクル、トムス、ケビン』は、世界人民の眞心に在りて、夫人が熱愛至誠の大精神をして不朽不滅ならしむるものなりさ。

家庭の氣品

よしや身に襤褸を着て席の上に起臥せんとも、心ばかりは上品に持ちたきものにてある哉。是れ單に其の見榮の麗はしきが爲のみにあらず、天地人生の樣々の美なる事物は、只だ此の上品の人の心地にのみ映じて、其他の濁り江には來りうつらざるが故なり。夫れ、碁將棊を見るには碁將棊の眼あり、古物刀劍を目利するには古物刀劍の眼あり、文字は文盲の目に映らず、英雄は凡人の目に入らずとせば、凡そ天地人生の美なる事物は、亦た此の美を觀ずることを得べき眼あるものにのみ認ためらるるは當然ならん。經に曰く、心の淸きものは幸なり、其人は神を見ることを得べければ也と。上品の事を見得るものは、亦先づ上品の心あるものならざる可らず。人心の調子を高潔にするの必要は、此に至つて明白なり。

論者。眞、善、美の三を分ちて各別に哲理を解釋すれども、其の互ひに照應して彼此合助するの秘密を疑ふものはあるまじ。眞理、善聖の事も、美の觀念熾んなるものにあらざれば、透徹すること難し。世には往々詩歌的の趣味なき大學者もなきにあらねど、審らかに其思想の傾向を考ふるときは、之に大なる欠典を存し、彼が如何に論理を緻密にしても、到底悟り得ざる一道の脈絡あることを發見すべし。善、義務、及び德行の事に就ても亦然り。美の想あるものに取りては、容易に直覺して之に愛慕し、好樂謳歌して愉快に執行し得べき事柄にても、不思議に美の觀念に欠乏したる士人に在りては、曲解、難解、至らざることなく、其漸やく究知し得たる時も尙ほ齷齪として絕えて妙悟の態なし。是れ偏えに美の想の煥發せずして、眞と善とを麗はしき方面より觀得する識力の足らざるが故也。

實際世間に立交りたる以后、右の如き偏僻の人が如何に得べかりし幸榮を損失するかを看よ。高潔なる人に接しても、其高潔に觸ることを能はず、妄りに邪推して兎角に之を疑ふこと、喩えば、曇月の夜、瘠せ犬が自己の影に懼れて空に吠え立つるが如し。又、赤誠ある人に接しても、其赤誠を感ずること能はず、動もすれば其信切を疑ひて兎角に身構を爲す、南洲先生の所謂ゆる朋友と同も寢をしても尙ほ匕首を懷にする人の如し。又、心限り人を愛することも出來ず、隨ひて人の熱愛

をも受入るゝと能はず、義を見ても飛込むと能はず、善と知りても遷ると能はず、斷えず準備腰掛の地位に立ちて左右前後を顧みる、其躰裁を形容すれば、宛然、無宿の非人が恐々ながら人の檐下に佇ずみ、今にも逃出さんとするの樣に似たり。又、世上に充滿する美談は兎角其耳に入らずして、醜聞を根堀り葉堀りして探偵し、我友と雖ども何時裏切るとあらんかなど心配して、人の腹中に我信を置くの勇なし、常に耳を聳だてゝ我が評判を聞かんとす、蚊聲、蟬音も亦た我を嘲けると聞くの時なしと言はんや。

夫れ如此きは、利益に於て損失なるのみならず、品德に於ても失敗なり。花は咲ひ、月は澄み、鳥は歌ひ、虫は吟ずる此の美くしの世界に安住して、親子あり、妻友あり、ホームあり、同國人あるの人世に吟行しながら、不斷、澁面當惑して暗黑の奴となるは何事ぞや。之れ實に、其氣品の優等ならずして、心の調子の下賤なるに由る。上品は、殿樣の姿を言ふにあらず、勲位爵祿の豐かなるを言ふにもあらず。眞とに、心構えの高等にして、氣位の超然たる、優美風雅の見識あるを謂ふ。人一日も此の上品の氣合ひなかる可らず。

上品の德かくの如し。其の養成に於て何如んの道ありやと問はんに、其の尤とも肝要、尤とも有力なるは、家庭に於ける感化より切なるはなく、此の感化の尤とも大なるは、幼年に於ける時の刺激に及ぶものなし。左れば、家庭に於ける幼年者の訓育は、殊に上品の德を養ふと全力を盡さずんばある可らず。

子供は元と應揚にして上品なるものなれば、此を其まゝに發育すれば、自然に上品の子となるべき也。然るを惜むべし、兩親、育兒の方を辨まへず、無用の世話を燒きて之を下品とするもの、滔々皆これ也。或は言はん、家富まざれば上品に育てがたしと。之れ世人の常に傳唱する辨解なれども、必竟は其無知を蔽はんとする誤解の論たるのみ。富家にても下品の子あり、貧しき家にても、上品の子あり。上品下品は、饒かなると乏しきとの相違より發せず、主として心掛の調子によりて由來するもの也。

然し乍ら、其子をして不自由を感ぜしめざるは、一大要件なり。其の欲しゝと思ふものを購求するを得ず、常に他家の子を羨ましめ、遂には何故え吾家にては購求するとの出來ぬ

やと疑惑せしむるに及べば、教育の危機近く迫まるものと言ふべし。故に、子を育つるものは、其の所望する品を可成く自由に購求し遣はすの準備なかる可らず。之には許多の入費を要する如けれど、其は比較的の事なれば、覺悟の次第により、其の困究を救ふこと難きにあらず。其故、如何んと言ふに、もし子女の爲めに備えたる餘資乏しきときは、居を轉じて吾家よりは富裕ならぬ人々の住ふ邊りに移り、無益に富家の子を羨ましむること無き歟。又は、子供の少なき近邊に轉住する歟。其邊の才覺方便を得んこと決して難事にあらじ。既に、子供の心に信用して、我親は買ふことの出來るものは何物にても買ひ玉ふと覺りたる以上は、入費の故によりて其の買入を留めたるときにても、子供の感覺に毫も惡結果を遺さず、安んじて別物品の買入を賴み、寧ろ親の選擇に安んじて之を樂しみとするもの也。此は四五歳以上の智覺あるものには容易に行はるべき所にして、即ち貧賤の爲の惡感化を與へんとす可き時節に、同時一方に此の轉善の處置を行ふことを得べし。又、小供の好むものは、反つて入費の少なきものを多しとす。之れ、複雜を避けて、單純を好み、合色を好まずして、元色を好く類の心理的作用より發することなれば、親にして信切に心掛け、少こしく器用の細工を爲して之に與へなば、山林田圃に自然が供給する材料は充滿すべし、若し能く之を利用せば、市府に散財せざる可らざるの必要は大に減ずるならん。家貧しきが故に子供の好求に應じがたしと云ふは、必竟、無知の故なり。無知にあらざれば、不綿密の故なり。鄭寧に思慮して、其方法を吟味せよ、貧富の問題の外に綽々たる餘地の存するを見ん。

此は只だ子供か要求する玩弄具の類に付きて一言したるに過ぎざれども、其他一切の事務を家庭内に處辨するとき、其の感化の如何に子女の上に及ぶやを考究して、之を苟くもす可らざるの覺悟は更めて喋々するを要すまじき筈也。一皿の菓子を分け、一椀の飲物を與ふるときにても、若くは、客に馳走し、他に遺物をするときにても、斷じて困究を示し、虛飾を繕ふ樣の事ある可らず。子供の眼中には、一家は即ち天下なり、一家の所有品は即ち天下の至寶なり。之にて滿足せしめ、之にて充分なりと覺悟せしめざる可らず。親、先づ其窮乏を示して、子供に之を疑はしむるの落度ある可らず。即

はち是れ分度に安んじ、相應に生計し、常に綽々餘裕ある家庭の現象にして、斯る家庭に長じたる子女は、たとひ其家が世間並に比較しては貧困の家たりしにも係らず、豐饒逸樂して毫も不自由を感ぜざるべし。是れ亦、其上品を養ふの工夫の一つ也。

凡そ此等の工夫は、思慮なき幼年者を遇するの方也。既に長じて十才以上となり、更に十六七才以上となる時に及べば、自から亦た變通の法あり。然れども、其の要理に至ては毫も異なることなし。もし此の一斑を推して全豹を察するの人あらば、蓋し吾人の所見を幾分の利用に供せらるゝことを得ん也。

歐洲諸國皇室の姻戚

一には數世重なり來りたるの緣により、又一には政治上の方便によりて、歐洲各國の王室互に姻戚を通ずること、古來の歷史にも見えたる多きのみならず、現に今世の事實なり。乞ふ左に、其姻戚の互に相結ぼるゝ處を示さん。

○英吉利王國

今上ヴイクトリア女皇　生母獨乙聯邦ザクセ、ザアルフェルド、コブルフのヴイクトリア公主ウイチンゲン公エミッヒ、カールの寡婦

皇太子アルバート、エドワード　妃丁抹王クリスチアン第九世第一皇女公主アレキサンドリア

○墺太利―匈牙利帝國

今上フランツ、ヨセフ第一世　生母獨乙聯邦バヾリア國大公主ソフヒー　皇后バヾリア國マキシミサアンの女エリサベス

皇太弟大侯カール、ルドウイク　妃葡萄牙國故攝政ブラガンザ公ミゲルの公主マリア

○白耳義王國

今上レオポルド第二世　生母故佛國王ルイ、フヒリップ王女公主ルイ、ヱット　皇后墺太利國大侯爵ジヨセフの女メリ、ヘンリー

○丁抹王國

今上クリスチアン第九世　生母獨乙聯邦ヘッセ、カッセン公主ルイス、　皇后ヘッセ、カッセン侯ウイルヘルム女ルイス、

皇太子フレデリック　妃瑞典邦威王カール第十五世皇女ロウイサ、

○獨乙聯邦

今上ウイルヘルム第二世　生母英國皇女ヴイクトリア　皇后シユレスヴイグ、ホルスタイン、ゾンデルブルヒ、アウグステンブルヒ公主ヴイクトリア

○希臘王國

今上ジヨルジオス第一世　皇后露國先帝アレキサンドリア第二世の弟大侯コンスタンチンの女オルガ

皇太子コンスタンチノス　妃獨乙皇帝妹ソヒア

○伊太利王國

今上ウムベルト第一世　皇后故ゼノア侯フェルヂナンド公の女マルゲリタ

○葡萄牙王國

今上カーロス第一世　皇后佛國貴族パリ侯フヒリップ、ダック、ド、オルレアン女メリー、アメリー、

○露西亞帝國

今上ニコラス第二世　生母丁抹王クリスチアン第九世皇女メリー、ダクマー　皇后獨乙聯邦ヘッセ國大侯ルトヴィグ第四世女アレキサンドリア、アリックス、

○西班牙王國

今上アンフオンソ第十三世　生母墺太利國大侯故カール、フェルヂナンド女、マリア、クリスチアナ(現王攝政)

瑞典那威王國、セルヴイア王國、チザルランド王國等略す

随感

○情感の調べ如何に響く

叱咤熱鞭せられて恨を訴ふるの口なきは、ひとり古しえの奴隷のみかは。獸力の猛威を施こし、無情の權力を弄そびて、人の弱きを利用し、其の涙に冷笑らひ、其の血に嘲弄ける人の下に立つ不憫のものは皆な奴隷の運命にやあるらん。更に其の穩やかなる事例に就き、下男下女の言はざる不平に同情を寄せなんとするものも、亦是れ一樣の恨思に對すると氣付かずして可ならんや。牛馬語はずして重きに堪へず、此に於てか動物保護の會あり、輿衆語はずして苛きに堪へず、此に於てか立憲代議の政あり。左れど、不平を訴ふるに由なく、情義の羈しを斷ちがたく、獨り涙に咽びて暮色檐前に歔欷する輩儕の感慨こそ、つねに得意なる人の往々にして見落す所ろなるべけれ。吾子を離して賣らんとする主人の嚴命に逆らはん樣なく、切めては同もに南人北客の買收する所ろとならんとて、「吾子よシカと吾に抱付けよ、恐らく一處に買はるるならん、」

"Keep close to yerea Mammy, Albert,—Close-dey'll put us up togedder."

と言ふを聞きて、今誰か慟哭せざる。而も、昔し此等の營業に慣れたるものに於ては平然たりき。嗚呼、吾等が情感の調

べの何如んに響くやとは、つねに省りみて審らかに自から吟味せざる可らざる修養なる哉。

○蓮岱畫房の隱士

下野國足利に旅して蓮岱畫房に隱士草雲氏を訪らひ、二十年間の山ごもりを聞く。三十九歲、妻を失ひ、四十五歲、一子を先立たせ、多恨極まりなく之より再たび娶らず。時勢を慨し、人事をうるさしとして遂に山に隱れたる此の方、只だ世上の風に耳を觸れざるをもて安しとす。嗚呼、情士頭を回らせば即はち仙。古より仙骨大率ね多感多情の餘燼たらざるはなし。枯木に寒鴉の宿るを見て、春を忘れ、落葉の流に托するを見て其元を思はずんば、之を至れりと言ふ可らず。冷々たる脫俗は、是れ炎々たる大俗。暫らく姿を變えて敢て瓢々乎として時にうつろはんとする也耳。

○花散りゆけば花を忘る

花散り逝けば花を忘れ、水流れ去れば水を忘れ、往者を念外に放ちて只管ら來者を迎えんとするは、一には輕薄極まりなき族の爲ることにて、又の一つには多恨極まりなき人の同じく爲る所ろなり。古人曰く、花開き花落つ亦心に關すと。心友の去來豈に心に關はらずして止まんや。誰か、一枝の末、今年の花は去年の花に似たりと言ふ。前花を惜しみて未だ其の影を忘れざるに、如何んぞ此を以て彼に同じと言はんや。逝く人の名殘りは、其の忘れ形見に存じ、風貌相似て稍や其の姿を現ずるに足ると慰さむ、此等の事は畢竟經驗なき人の言ふことなり。髣髴たる其影斷えず在り、豈に形の似たるものを以てして初めて之を憶起し初めて之に慰藉せんや。寧ろ願ふらくは、再たび其事を言はず、其似寄りを見ざらんことを。世上の花、開き又落つること幾片ぞ、恨思の樂しみ又恨むこと幾人ぞ。而も、花遂に永遠に人と副はず、只だ其の餘香をとゞめ、其の名殘りを覺え、其姿を記るしてもて長久に相伴ふとなさん哉。

○寡婦未だ曾て多く訴えず

寡婦未だ曾て多く訴えず、此を以て其の心情を覺るもの太だ稀なり。寡婦に種々あり。墳土未だ乾かざるに忽まち餘念

を起すの徒は眞に論外なり、須からく直ちに其行かんとするに任かすべし、法例習慣の之を束縛するは寧ろ不愍にあらずや。涙久しく袖をうるほし、憂ひ長く胸に結ぼれて、心の鬱悶を解かん術なく、如何なれば妾を棄てゝ獨り先だち彼蒼には逝き玉へる、殉して御あとを追はんは願ふ所なれど、取のこし玉ひし程なれば、追ひまつらんには、彌よ御不興をや蒙むらんずらん、何どて妾にも同もにと仰せられざりけん、棄て行き玉ひし隔ての御心こそ恨めしけれと言ふものあり。われは、此類の寡婦に告ぐ。靈性は消るものにあらず、愛の交はりは長久に生存べし、御身ひとり棄られたりと思ふは即ち御身が先君を棄つるなり、何となれば、先君は其の靈の自由なる交感によりて、今堪えず御身の心裏に往來しつゝあるを、御身感謝して之を迎え、觀じて之に接せざるは即ち棄て參らするに等しければ也、御身が思ふ所に先君の姿現はれ、御身が語らはんとする時に先君の答聞ゆ、これ先君靈性の今尙は現存せることを示す一端の證しにあらずやと。若くは、又、先君の事業を嗣ぎ、又は先君の遺子を育て、失逝し姿を現在に象どりて、情思を幽明の二界に渡らせ、切めての慰藉を形見の餘韻にとゞめまく欲するの寡婦あらば、そは極めて健全なりと言ふべけれ。更に亦た胸底深く彼人を藏め、心血紅き邊り濃やかに之を抱き、常に思ひ續けて、微笑みて其傍らに侍べらんずる如き心地あるものこそ、いとも〳〵目出度けれ。大凡そ、此等健全、美妙なる心掛ある寡婦こそ、其思つねに清々しく、其の姿つねに活々として決して鬱憂蒼白の態あるまじき也。其頰紅を呈し、其歩み敏活に、洒然として寧ろ若返りしたるの風采あるべきなれ。世人此の秘義を知らず、寡婦に花さくを惡兆とし、强ひて其の半死の躰ならんことを望む。夫れ、清々しきと、生めかしきとは固より同じからず。寡婦の生めかしきは、尤とも嫌忌すべし、其の清洒爽快にして生々としたる風采のあらんこそ、之に最上の心掛あるものとは言ふべけれ。但だ彼の蒼白鬱悶の寡婦、活氣大方失せ、生氣半ば死せるに似たり。これは是れ第二種、故人を追ふて痛恨極まりなきの人か。もしくは只だ世習に縛られて自由に處置しがたく、心中別に思ひを固むるの人影もなく、徒らに惜々として情緒散亂し而も之を結ぶべき運命絶たりと思惟する失望の人か。同もに是れ注意して慰藉同情を寄せずんばある可ら

ざるの類也。嗚呼、女界太だ奇事多し。未婚の乙女にして心意別に契婚するものあり。既に婚して尙ほ乙女たるものあり。良人ありて尙ほ未亡人たるものあり。未亡人にして而も斷えず同棲の情感あるものあり。單に其形を以てして一概に論ずべきにはあらず。嗚呼、文士大率ね寡婦に同情を寄せず。盛んに妙齡多望の乙女に偏して、思ひを殘生不運の大姉に傾むけざるは抑何事ぞや。

教育

教育悟の徹底

教育に『注入』『開發』の別を揚言し、若くは、何々派の教育、何々氏の教育主義などを祖述して、能事了れるかの如き觀を呈する人の多きは奇しむべし。ことに、古の教育は注入的にして、今の教育は開發的なりと言ひ、開發教育なるもの丶初めて今古に發明せられたる如く思ふ人もあるべし。又、何々派教育は何如なる必要の爲めに起り、何々氏の教育說は何如なる時弊の爲めに投合せられしやを考へず、單に其理窟を飜譯して得意なるもあるべし。

教育は昔しより人間を教育したる道なれば、其の大體と主旨とに於て左したる相異のあらん筈なし。但だ夫れ時代の必要に適應したると、教化法の外形を變えたるとによりて、世々時々、異樣の教育の行わるが如けれど、苟くも其の大主義とし、大方道とする所ろのものに於て、先後今昔、雲泥の相違ありと言はんや。但だかの歷史の外形に拘泥し、淺薄なる教育史に惑迷する人々の誤まつて隆んに其の異同を辨ずるものある耳。

『注入』『開發』ともに別異にあらず。十分なる『注入』には、必らずや『開發』を含み、十分なる『開發』には、亦必らずや『注入』を含む。或る時には、其現象の傾向に對して注入的と名し、又或る時には、他の傾向に對して開發的と注すれども、此は只だ、現はれたる半面の相に對ひて別個の名を附したるのみ、豈に注入と云ひ、開發と云ふ僻局せる教育あらんや。注入を要するとあり、開發を要するとあり、既に注入、開發と分別

して異觀の名を附すべきほどの双對の事實ありとすれば、即はち此の二ツを双つながら併せ行ふことは、圓満達了せる教育の素より期する所ろ也。

達人の心は達觀して初めて覺悟するとを得べし。かの先輩の教育士が、種々の勵言を爲し、遂に何々派の教育若くは何々主義の教育などと稱せらるべき特殊の立説を爲したる所以、何處にありと思ふや。此等の先輩は、或ひは有意識に、もしくは無意識に一代の傾向に反動し、當世の病弊に對して適應の藥言を投合したり。故に、其の言偏倚し、其論一方に傾むく、則はち是れ後世人の稱して、特に何々派、又は何々主義と局定する所のものある所以也。之を譬ふれば、猶ほ宗派の如し。宗祖なるもの豈に一宗を開くの意あらんや。偶たま應病與藥の慈悲、后世に形式を遺して、後の摸倣人、たゞ其の皮相に則とり、盛んに宗派の名を附して之を偶像視すると相似たり。今日の教育家が祖述譯論して大いに勵言するが如きとは、必竟先輩意外の事のみ。教育的一派の開祖が毫も期望せざりし所ろのもの也。

形樣方式は死物のみ、但だ人ありて之を活かす。故に、大いなる教育的方式には、大なる教育的人物を要す、此れありて初めて活動すべし。苟しくも、先輩の遺訓を學んで、其の眞知を得んと欲するものは、直ちに先輩胸臆の深宮に參し、其の意衷肝膽のある所ろに窺がひ、涙落ち血湧くの邊りに吾が眼識と心情とを養成せずんばある可らず。之を此れ爲さず、單に其言論字句を辨じ、其の偏倚せる主義を崇拜し、先輩赤誠の迸ばしらざる所に執着して、反つて最大主要の祕義を看過し去るは何事ぞや。

誰か、大悟徹底を以て宗教界の特占する所と言ふや。一藝一道皆な是れあり。ひとり、堂々たる教育に於て之を辯ずるものゝ少きは最とも奇しむべき也。方今、盛んに教育論を聞く、而も此邊幽玄の工夫に一道の異彩を放つものを見ず、總べてこれ方樣形式を論爭して日も亦た足らざるが如くするもの多きは何事ぞ。

教育の技藝は一大事也。教育の形式も亦た一大事也。今の所謂る學校管理法、學校衛生法、亦た一大事也。然れども、此等もろ〳〵の大事に優りたる一層の最大事あるとを忘る可らず。先づ藝に熱心して其の形式に執着したるほどの覺あるも

のにあらざれば、遂に頓悟大成の事なし。一段の拘泥は即ち他日の開達たるを否むにはあらず。而もたゞ此に固着し或溺し、更に破して一段の靈變新歩を了するを能はざるに至つては、尤とも惜しむべき也。

吾人は、京地浮華の人士に餘り多くを求むるものにあらず。又、喧しき教育論家にも餘り注意して聽聞するものにあらず。但だ夫れ山深く水清く、花咲ひ雪包むの田舍鄕關に於て、文部省の教育方針が幾變遷するに頓着せず、八釜しき教育論が熾んに飜譯するにも氣を留めずして、孜々兀々、其の教育法に工夫し、辛勞し、悔改し、一新し、再奮し、又失敗し、又成功し、遂に自得頓悟して妙味を不言不辯の裏に收めつゝある未來の大教育家を思ふこと久し。諸君たるもの自重自愛して一層の大成を期せざる可けんや。夫れ、今の教育界に大悟徹底を祈望し若くは警戒する論議の尠きは倘ほ忍ぶべし。田舍地方、深く修め遠く養ふの教育道士なるものに至つても倘ほ此邊の覺悟あること少なしとせば、これ實に日本教育界大痛歎の事にあらずや。

天才と學校教育

天才は學校に於て造らるゝものにあらず。然し乍ら、學校によりて造らるゝことの多きを疑ふ可らず。

天才とは、天稟の才を言ふ。才に天稟にあらざるものなきは論なしと雖ども、此の天稟に人の勉强と、周圍の開發と、事情の固成とを經て、而して此を遺傳するに及んで所云ゆるジーニアスを生ず。故に、ジーニアスの天才なるものは、普通人、天より稟けたる才能を、一方の傾向に特發せしめ、而して之を無覺無意識の地に達する迄に完成せしめたるもの。左れば、多くは之を遺傳するに及んで初めて其の煥發を見る。

既にジーニアスとなりたる天才の教育には、學校教育は大率不適當なり。奈何んとなるに、學校教育は、これ平凡教育なるが故也。こゝを以て、天才の幼にして學校にあるや、大抵は懶惰放逸して、定課を規則的に修むることなし。

然れども、之を以て、其の學校生涯を大なる損失の如く言ふことなかれ。天才は、日光の如し、遂に消す可らざる也。天才は水の如し、遂に塞ぐ可らざる也。其の逢遇せる幾多の妨害

らしき事情は、偶たま之を、激成し、之を琢磨する所以也。天才は到底滅却するものにあらず。左して痛心慷慨して其の傷められんことを杞憂す可らず。

天の大人を降さんとする、必らず之に困難を與ふとは、所云ゆる大人の天才が、普通尋常の開發に適當せず、常に之と衝突矛盾するの躰也。天才が學校に於て苦痛するも亦た其の一例に非ずや。而も之を以て天才を害するとするは、かの孟子の至言を善とせざるにひとし。天才は至寶也、天人宇宙ともに之を惜む、安くんぞ輕々しく傷害せられんや。

左らば、學校が天才の敵にあらざるを知るべし。且や、天才を育造したる其の由縁に溯ぼるときは、即はち普通教育の之を成就したるもの多きことを知了す。即はち之れ、學校に於て天才は造られざれども、學校によりて造られたる因緣は尠なからずと言ふ所以也。

嗚呼、天才に對する學校教育の態度は、取わけて痛心掛念すべきものにあらざる也。但だ夫れ、學校内に眞教育者あり、能く看破達觀して、直ちに天才を開導するの活手段を巧みに運用し、組織的平凡畫一の處置の外に、綽然として妙に施こす所ろのものあらば、正に是れ最上善たること固より論ずる迄もなし。

學校教育は智育に偏するものなり

學校教育は智育に偏すべき筈なり。何すれぞわざ〱之を歎ぜんとはするぞ。

今の學校は古の學校と異なる。組織、畫一、平等は、其の當然の本色なり。此の所に於て、古學に於けるが如き特發と親炙とを要めんとするは、不可なり。亦た此所に於て、三育併行の圓滿を要めんとするも不當なり。

今の學校は素と西洋に規範を取りたり。所云る西洋文明を輸入するの大勢に順じて、直ちに古風の師弟的特發教育を廢し、以て此の組織畫一平等的の教育に變えたる也。

而も、西洋に於ては、單に學校のみを以てして圓滿の教育を施行し得べしとはなさず。家庭に於て情を養ひ、教會に於て德を養ひ、社交に於て躰と美とを養ひ、學校に於ては主として智を養ふことを旨とす。宜なり、學校教育の智に偏することや。

吾文部省忽然として西洋の學校組織を輸入せり。此の輸入は當然にして敢て憾惜すべきことにあらざる也。而も此の當然なる處置よりしては、亦た當然なる結果の生じ來ることを驚ろく可らず。今の學校組織が、智育に偏するを歎ずるものゝ如きは、抑そも鷄卵の孵化して、雛を産したるを悲泣するの類にあらずや。

學校教育は普通教育なり

學校教育は、普通教育なり。普通教育は、平凡教育なり。固より格外の期望を置く可らず。然し乍ら、平凡教育の名によりて、其の教育を輕んずることある莫れ。凡そ、人の手と、人の組織とによりて教育する教育は、概して平凡的にして、即はち普通尋常的のものなればなり。

文明開化とは、普通尋常の人の概して一と通りの文化に達するの謂ひ也。此故に、文明開化と相伴なひて、普通教育を要し、普通教育に伴なひて立憲政躰を現出す。何れも聯關したる出來事なれば、其一を廢す可きにあらざれども、其の價値の眞性質は辨知せずんばある可らず。文明開化に格外の尊位を附し、又は、立憲政躰に過分の要求を課す可らず。人間の數の增加するにつれて、自由交易、もしくは世界的外交を必要上より現出し、之につれて、文明開化の風儀あり、又、普通教育及び立憲政躰の實施あるのみ。

方今、文化の名を慕ひ、もしくは、立憲政躰の實を擧んとするに方りては、固より普通教育を盛んにせざる可らず。其の相當の價値を知ると共に、其の現在の必要を辨じ、餘り格外の望を置かざると共に、之を要する所以の缺典は補はざる可らず。眞とに知れば、不平なし。不平なきが故に、合然相當の盡力あり、即はち、亦相應の結果あらん也。

大教育家を求むるの聲

鷗村

戰後の教育界はやうやく國粹に誇り、戰捷に驕り、一にも二にも尙武的忠君愛國の形式的教育を振廻すことに飽きて、眞正偉大なる教育家の發現を俟たんの聲、やゝ盛んなるを致さんとすること、斯界の爲め、實に賀すべしとなす。然りと雖も亦

彼徒らに人物の現はれん事を俟つと何ぞ世を益せんや。大教育家の來るを望まんとすれば、之が爲めに道を備ふるとなくんばあらず、洗禮のヨハチたるもの、此處にも彼處にも起りて、其來るを迎ふべきなり。徒に其來らんとを欲して、之が爲めに其道を清めずんば、焉ぞ其者の來るとあらんや、否假令天命によりて降るの大教育家現出するとあらんとても、此時能く彼を受くると能はざらんよ、必ずやユダヤ人が救世主の降臨を熱望して、而してナザレのイエスの傳道に、耳あるもなほ聞く能はざりしが如けん。これ蓋し世態の常なるに、試に一顧我教育界を觀察するに、此處よく眞誠熱實の預言者的大教育家の出世するとありとするも、彼を受け彼に聽くべしと信ずべけんや。偏狹なる國家論を迎へ、活動なき忠君愛國を說き、狹隘なる倫理說を用ゐて、自主自由なる國民の良心を束縛せんとし、器械と形式とを採りて、子弟が腦漿を惑亂せんとする、この痛むべく、憂ふべき我教育界の、未だ其頑迷より醒めずんば、必ずや濶大英爲の教育家を容るゝの餘地を有せじ。今の教育界より見れば、此種の教育家たるものは、國家を亂り、尊嚴を犯し、所謂亂臣賊子の名稱を以て、

之を嫌忌すべきものにして、遂に自家の頑迷固陋を覺らず、其實國是の進步を害し、國民の子弟を鈍するものたるを知らざるなり。今の教育界、眞に大教育家、世を救ふに足るべきものを求めんとするか、さらば其剛愎頑固の迷へる精神より悔いよ、然らずんば彼は遂に汝等の爲めには來らじ。

不振なる今日の教育界、假令ひよく活動するものと見做さんも、素より主義なく熱誠なきのもの、其活動は、たゞ物に當り事に觸れて、痙攣的運動を示する過ぎざるものを、其活動は乍ちにして起り、乍ちにして止んのみ。其例遠きに非ず、戰後の教育界、其方針の運動を呼ぶと、暫くは盛んなりしが如きも、今は既に活氣消し、運動止まり、却て教育界不振の聲をきくに非ずや。されど不振は素より自然の事なり、主義なく定見なく、精神なき痙攣的運動の終局の目的は、不振靜止にして、自ら彼眞によく熱火燃るが如き有主義の精神によりて活動するものゝ、其目的の斷えず活動にあるものと異なれり。此教育界の狀態にして、千百の教育會ありと雖も、何の効をかなさんや、幾許の教育論ありと雖も何ぞ益せんや、否な彼等は、會ま以て教育其の者の眞理を蔽ふの陰雲たらんの

み。國民を教ふるに縮小的國家を以てし、國民を教育すとは極言せば彼等をして、偏屈にして達識なく、其肱は體に膠着して動かず、其目は横に逸れて、嫉視するの人間たらしめんとするが如きのみ。吁痛嘆措く能はざる今日の教育界、誰か能く之を救はんものぞ、偉大なる教育家を俟つや切、然れども先づ現狀を憂慮して、天下を思ふの同志、相奮つて、自ら來るべきもの丶爲めに其途を淸めて、而して其來るべきを俟たずばあらず、たゞ袖手徒らに大人物の出世を俟つべけんや。

ヘルバルト學說

倩ても心變りのし易きものは、我教育界なるかな。其ヘルバルト主義教育說を一も二もなく觀察して、其五段教授法、多方趣味說に醉ひたりしに、今となりては、其說は不健全なり、開發教育に反對なり、教育界の進歩を害したりと稱し、罪を此主義に歸して、之を却けんとす。吾人はヘルベルト教育主義其自身が、さる弊害を釀したるものなりと信ずると能はず。必ずや是れ之を輸入崇拜したる學者輩が之が運用の妙を知らず、たゞに死文の上の死論を見て、ヘルバルト等が其學說を基けたるの精神を察すると能はざりしによらずんばあらず。精神は始めなり、實行は中なり學說は終りなり。學說よりいへばイブルヅンの自然教育ヤスナイア、ポリスの放任教育は、謬謬だらけなれども、其成功大に見るべかりしもの。其精神の熱誠によらずんばあらず。學說何をかよくせん、要する處精神に在り。たゞ學說のみを死文の上に研究して、其精神を汲むとなくんば、何等の教育主義も遂に弊害を生ずるに終らんのみ、豈にたゞ獨りヘルバルトのみならんや。今日の教育界要する處のものは、學說の妙なるものに非ず、形式の巧みなるものに非ず、實に此等を貫通して、此等を活用せしむるの大精神に在りとす。彼眞誠なる教育家の出現を俟つといふものは、即ち此大精神の活動を求むるに外ならざるなり。

華族教育の方針

近來學習院長の方針は、華族を教育するに、其學習院に於ては、主として、外交家と、軍人との養成なりと。華族の數一兩毎に增加し、皇室の藩屏いよ〳〵堅固ならんとすると同時に、銳勉精勵彼等が進んで國家の藩屏たるの用大ならんとを望むものなり。近衞公、華族の狀態及び華族の家庭につき人に談じて

華族の狀態　華族の戶數は大略八百戶あり。槪して中流以上の資產を有し、衣食のために勞することなし。故に勉强心鈍く進取の氣象に乏し。學問あるものにても、多くは玉突骨牌に月日を消す是れ境遇の然らしむる所なるも、又華族自ら責任を重んぜざるの致す處。

華族の家庭　華族に三種あり。大名華族公家華族新華族之なり。此三者資產の上、又境遇上より其教育を統一し難し。大名華族の子弟は必ず通學するに從者を携へ、學問の成績不良なるを以て教師の罪に歸し、教育の途嚴密なれば、之を以て教師を怨み、其家庭に在ては、親子他人の如く、其養育は人任せとなり、ために驕慢の氣を生じ、諛辭を喜び迎へ、學問進まず。又臆病にして世人を恐るべきものとなし、勉めて世と相遠ざからんとす。公家華族は相當の智識ある者鮮からざれ共、大半は貧困なるが故に智識は徒らに卑劣に陷り、新華族に至ては維新當時若くは其以後の功勞者及び其子にして、皆布衣より起て、一躍榮位に上れる者其子弟は往々父の功を恃んで、他の子弟を凌駕するの嫌あり。現に學習院中征淸軍に從事したる新華族の子弟ありて、教師も其取扱方に苦しみしを以て、父兄に忠告し當人を諭さしめ、近時漸く其弊を減ぜり。且つ新華族の婦人中には如何はしき身分の人もありて、自から家庭の濫れたる者多きを耳にす。子弟が讀書すれば臆がしと叱し、自からは柱にもたれて、三絃を弄するがごときもの なきにあ

らず。此有様にて家庭の教育杯は到底望むべからず、而して學習院には同族中又た此等小種別ありて、各々其弊を異にするが故に、一般學校よりも取扱困難なりとを以て子弟と家庭とは成るべく遠ざからしめざるべからずと說き、學習院を小田原に移轉するの良策なるをいひ、公は既に此議を宮内省にも上申せしが、同意を得ざりしといふ。華族子弟の教育は、實に難事なり、これ實に良くて素位素食無益有害の徒となり、惡くせば社會の厄介物となり易き危機に置かれたるものを良導して、皇室の藩屏たらしむるものなるが故に難事なりとす。

臺民教育の方針

去月十八日桂臺灣總督令を下して臺灣土民教育の方針を示すにいへり、

土人の教育は、一日も輕忽に付すべからず。而して之を施行するに當りて、邦語を學ばしめ、主として帝國なる感念を養成するは、勿論之と同時に知識を開發するの手段を行ふべし。而して刻下に於ては、教育方法の高尚ならんより、寧ろ普及を以て要旨とすべし云々

臺民をして王化に霑さしむるの道、其教育を要すると甚多しと雖も、先つ要する所のものは我の德政に在り、土民を酷待し害毒を輸入し、私利を營むことをなさば、空文なる忠義道德の教訓、果して何の効をなさんや。之を思ふて爰に到る、臺民をして、大献身熱誠の教育家の教化を蒙らしむるを得んとを望むや切なり。

今日の學風

大西祝氏『學風論』に曰く

世俗を離れたりと云ふ高尚なる學問に從事する者も多くは唯所謂專門家にして、君子の學は今の學に不用なるが如くに見做さるゝにあらずや。今の學問を云ふ者動もすれば唯事物の相離れたる方面をのみ視、學問は詩にあらず、詩は學問にあらずと云ふ、而して詩趣ある學問の何たるに思ひ到らず。若し學者が君子たるの Culture を缺き、學風が清高の氣韻を缺かば是れ一國の文化の耻辱にあらすや。學界に在る者、教育に從事する者、豈思はざるべけんや。予輩はマシウ、アーノルドと共に Culture の眞義を發揮唱道せむ者の多く出でんことを望む是れ君子國の眞面目なれば也

實利に走り、職業に偏し、狹隘なる國體論に陷り、主義なく、信仰なく、靈心なき、今の學風に對して、吾人は大西氏と憂を同ふうするものなり。

大隈伯國民の教育を談す

早稻田の伯爵氏、近頃某新聞記者と、天下の時事を談ずるの序、國民教育の經綸を談ず。曰く、

普通教育と云ひ專門科の講究と云ひ、學問其物の範圍は、固より廣大無邊なれども、學問の方法上より云へば、之を要するに、古賢の發明を祖述し、先人の足跡を追ふて以て滿足すべからず。學問の基礎に依りて、先哲未發の法門を開き、造化の秘密を暴きて、之を人間の占領する所と爲らしめざるべからず。所謂る格物致知の大本領亦た此義に外ならざるなり。而して日本今日の學問界は、之を要するに尙ほ幼稚の域を脫し難く、所謂る發明は之を歐米に委して我は汲々として、其成案を摸倣するに過ぎず。之れ實に學者の奮發一番すべき所にして、日本國民たるもの是非共、敢爲の勇を養はざる可らざる活問題なり。斯の如くにして、内に學術を修め、外に未曾有の發明を成効し、拮抗して人後に落ちずんば、則ち歐を凌ぎ、米に駕する固より以て及び難しとせず。學問の進步此に至らば、世界を敵とするも亦た恐るに足らず、國民は、此目標に向つて、須らく勇往邁進すべし。

此平凡の說と雖も、これ伯が國家經營の方策より胚胎す、學問教育に偏向するの說と雖も、これ先づ國家を以て天下に當るの道をいふなり。此平凡の說といへども、今の狹隘自覺的なる國家教育をいふものなどの、迚も敢育し能はざる處なり。

何事もかはりのみゆく世の中に、
おなじかげにてすめる月かな。

評論

我同胞の弱點

如雲散士

何故に創意をもて摸倣に優れりと言ふ乎。何故に、小慧を以て堂々に劣れりと言ふ乎。吾人は寧ろ此を以て優劣を品せんとするの見地を優劣せんとす。創意と摸倣と、小慧と堂々と夫れ果して何の先天的優劣かあらんや。

我國古來の經歷を考ふるに、創意を以てするよりは摸倣を以てする方、國家の發達に利益ありたり。國民乃はち摸倣に長じたるは、其の忠なり、何んぞ之を其の弱點と言はんや。既に摸倣にして可なりしならば、小慧の更に善なりしとを知るは易し。堂々として倨傲なるは、豈に摸倣者の爲すべき所ならんや。小心細慧、機敏怜悧にして、迅速に他の利益を吸收し去るは、應に其の分なりしなるべし。

建國以來二千六百年、未だ曾て邦家を土泥に委せず、嚴として今方さに世界の列國と對峙せり。亦何を顧慮してか自から特に卑下し、敢て殊更に弱點を意識して時勢の氣慨を喪失するとを務めとせんや。丈夫二十、年既に丁して獨歩獨行するに及べば、須からく先づ其の獨立の天職に自負すべし。天靈地氣抱合して秀拔なる製產あり、玆に一個の人を生じて現に世表に立たば、其の特禀の使命に感謝して、天下個一の所長を發揮す可き也。何んぞ局促として我が弱點に驚怖し、萎微として振作奮勵せざるべけんや。一人既に然り、一國亦然り。國家切りに弱點を自覺するは、必らずしも慶兆にあらざる也。

然りと雖ども、特禀既にあり、所長亦既に存して、而も自から覺らず、殊更に劣敗の地步に跼蹐して敢て人爲の弱點に拘泥せんとするに至りては、則はち、此を警策、激勵して以て當然の地步に進み立たしめずんばある可らず。此は是れ其の浮誇を鞭うたんが爲めに其弱點を暴露するにはあらず。其の無用の謙遜を惜しむが爲めに誘引して助長し飜つて以て其の弱點を嫌忌せしめんとて也。

故露公使ヒトロボー、我同胞を評したるの言新聞紙上に喧囂

たり。吾人未だ之が原文を見ずと雖ども、恐らくは多少の誤譯あらんかを疑ふ、其の餘りに日本的の措辭形容に多ければ也。然れど、吶辯を通ふして人の眞情を窺ひ知ることを得ば、此の不十分なる言語も亦た談者語らんとせし中心の秘密を見めすに於て助けなくんばあらず。吾人の如きは即はち此の一評に尠なからぬ興味を惹起したるもの也。

ヒトロポー氏謂ふ所の評論は、當れりや否や。其の所謂ゆる賞めらるゝことの好きなるものは、總じて人の弱點なり。何んぞ我同胞に付きてのみ之を誹らんや。國を擧げて英傑なしと言ふが如きは、素と凡庸の往々にして壯語する所ろ也。大人古より未曾て如此き淺薄の言を弄せず、曰く、後生恐るべし曰く、汝等我に優りたることを爲さんと。此れ眞に人生を達觀したるものゝ常に寅畏して告白する所ろに非ずや。吾人は此邊の壯語に於てヒトロポーに多とするものに非ず。

吾人はヒトロポーが評論の言語に於て服すべきものあるを見ず。但だ彼をして如此く言はしめ、如此く感ぜしめたるの事情に就て、彼が未だ喝破せざる一道の消息を隱約の裏に溯測し、乃ち警然として覺悟する所のものあり。

惟ふに、同胞現時の弱點は、自から先づ消極の地歩に退ぞき、初めより『受身』の態度をもて、外交界に立たんとするの一事にあり。

たとひ我國面積の小なりとも、我國地境の隔たれりとも、歐米第一等國の間に立たんに何の不足かある。唯だ有り一の大不足とする所のものは即ち自個製造の引込思案にして、元是れ無用無益の謙遜に過ぎざる耳。我同胞は、其出世の後れ馳せにして、列國の先輩に對して後進生たるを自覺するが故に、其の交際に接するや常に一目を輸し、劈頭最先に氣後れするの狀あり。もろ〳〵の痴鈍、もろ〳〵の失敗、之より發す。豈に是れ同胞の弱點に非ずや。

人生の交渉は不可思議にして、單だ其力量を以て相ひ優劣するにはあらず。他の種々の情實之に加はつて、先後主從の別を劃す。或は、吾が手と云ふものあり、奇怪の電氣先づ射發して先制の氣を奪ふ。ことに甚はだしきは、先輩後輩の相違なり。曾て兄視し若くは師事したる人に對しては、將來長久に面はゆき心地し、吾が才能を十分に顯昭すること能はざるを常とす、これ人情の美の潛む所にして、同時に其の弱點の存

する所也。國家單に生きず、只だ人によりて活動するが故に、國家の情も亦た個人に同じ、國家にも亦た其の苦が手あり、其の先輩あることを奇とすべからざる也。

因りて思ふ、吾國、世界に對するに際しての大弱點は、其の出世の後れ馳せにして、其の對等に自から一目を置くの謙遜にあり。海外人屢ば我同胞を評する所の批判は、大率ね此の弱點より發射せる形影を是非したるに過ぎざる耳。其の眞性狀、眞價値に至つては、豈に容易く一日の論定に委すべきならんや。ヒトロボー曰く、日本と大外交を爲さんと思ひも寄らず、胸襟を開き、意氣投合し、肝膽相契合する如き外交は所詮此國に於て所望す可らずと。此處ろ一應の理あり。其の由縁は、吾に外交家なきにあらず、吾に英傑なきにもあらず、只だ國民最先に『受身』の地に立ち、常に恐懼畏怖して全く大放任大信用の手腕を奮ふこと能はざるが故のみ。

彼の徒らに慷慨して動やともすれば攘夷排外の習氣を再演せんとする如きも、到底は此の消極的度量の事機に驚怖して發動したるに過ぎざる也。我國の新聞紙上に屢ば慷慨せらるる痛切の外交論なるものは、多くは驚怖の調なり。もし驚怖にあらざれば、ひがみ根性の調なり。其の莊麗博大の氣韻に乏しきは寧ろ恥づべきに非ずや。彼の大名の子と、成り上りの子とを比較せよ。人の我に接すること薄く、我に待すること冷やかならば、一は其貧しきかを念ふて、氣の毒に感じ若くは其多用にして煩らひたらんことを慮ばかり、平然として辭し去るべきも、他は忽まち慷慨して、無禮漢、我に失敬なり、我に侮蔑を加ふなどと激論するなるべし。彼の容易に人を疑ひ、容易に人に怒り、直ちに我を惡遇すと感覺するものは、多くは、成り上り、もしくは貧相に生計する徒輩にして、斷えず人の輕蔑を加ふることありもやせんと苦慮しつゝある族なり。故に、國民にして容易に外國の待遇を疑ひ、動ともすれば慷慨して熾んに排外氣象を喚起するは、寧ろ邦家の恥辱なり。

吾人仔細に觀じて、吾同胞の海外第一等國民に劣退すべき所以を見ず。其の仲間入りの遲く、世界共同の系圖に闕はるとの少なかりしとも、之を以て恥づべきに非ず。よし又彼等共同の文化の風に似ず、此等と相交つて後輩の地位に立せらるるとも、夫が爲めに自個特占の所長と使命とを疑ふ可きにあらず。吾同胞もし無益の引込思案を除き、久しく消極的の地

位に留まらず、受身の態度を拂棄して、働き掛の氣合ひを取り、さもしき根性を出さず、ひがみ根性に屈せず、鷹揚上品にして紳士貴婦人たる品格を保ち、對等平一の氣性を以て世界の列國と交際せば、曩に徒らに慷慨せしとも今は可笑しくなり、曩に累りに疑ひしとも今は明白となり、曩に空しく崇拜せしとも今は平凡となり、殆んど湯茶を飲み平臥して快談するの心地に達して、初めて對等の外交あるべき也。念ずべし、方今大外交なきは、我に其人なきにあらず、其心構への臆したるに由る。方今の弱點あるは、我に其天稟あるにあらず、其の氣位の尙ほ下品なるに由る。外交は談判にあらず、生平談笑の間柄にして初めて對等の處理あるべし。國民の交際は爭奪にあらず、互ひに虛心平氣なるに至つて初めて完し。吾人が今の同胞に惜しむ所ろのものは、只だ其の事々に『受身』の態度を取るの一事にある也。

昔し、大兵の關取、象の步むが如く濶步し來りて途に小身の武士に合ふ。互ひに爭そふて罵しる。關取、面倒なりとて、一呵、武士を引つかみ、目より高く差し上げたる爲體、宛然隼鷹が小鳥を捕へたるが如し。然るに、武士はカラ〳〵と打

笑ひ、平然として其の投げ出さるゝを待ちたり。蓋し、彼は竊かに一足の拇指を關取の大髷の中に挿み、投げらるるの瞬時、轉倒して其腦天を蹴らんとせり。胸算成竹あり、態度自若たり、亦何んぞ恐るゝとをせん。切りに頭上に大言し、漫罵して止まず。關取は、何處に投げ出さんかと躊躇し、而も放擲すると能はず、遂に差上たる儘にて、大男の大泣を爲したりと傳ふ。

嗚呼、小國に小國の柔術あり。投げんとするものには投げられんとし、差上げんとするものには差上げられ乍ら、策の施すべき餘地、綽々として存せずや。此の覺悟あり、此の膽勇ありて、四方に旅びす、平々自若として何處に行くとて通ぜざらん。吾人は、吾同胞の武士氣質をして一層の洒落一層の通人的たらしめんとを希望して止まざるもの也。

デビッド、ベーリ曰く

學校は主義なき人をいるゝの地に非ず我再び言はん。學校は主義なき人を容るゝの地に非ず。主義なき輩は空しく去りて、他に活路を求めよ。もし他に譲るとなくんば、飢餓を其身に及ぼさしめて、靈魂をして、永く其造主の御手の許に歸りて、其安きを得せしめよ。

雑録

情なき世

去ぬる年花既に謝して流水行春を誘ふ頃或新聞紙は報ぜり一人の小女芳紀まさに十八僅に開し花の身を再びかの賤きうたひめの間に置きて浮れ男のすさびに任すをいとひ一夜落紅を誘ひし水に誘はれゆきしと多情多感の余一讀忘る能はず涙を袖に包みて稿を起せしより茲に一年有餘幾度か改删してなほ情をつくさず却て徒に詩となりをはりて情を失はんを恐れ遂に此紙上に於て世の兄姉諸君の同情を求む

花影

都の空も春くれて、花のなごりの葉さくらを、
かすめる月のにほはせて、靜にわたる夜あらしに、
ゆらぐ汀花と見ゆれども、花見し人のひとりだに、
あはれしらぬか訪ひも來ず、隅田の堤に夜はふけて、
いつとは知ず音もなし、そぼふり初しはるさめに、
涙にぬれしたもとをば、なほもぬらして辿りゆく、
あはれ小女のたゞひとり、櫻の枝もうなだれて、
思をわかつさまなるに、などて水のみ見つむらむ。

思ひかへせばなつかしき、我父母の居ましたる、
昔のさまにたくらべて、いまのわが身ぞ怨めしき。
などて我身もちゝはゝと、ともに死ずにありしやら。
心ならずも僞の、笑顔つくりて朝ゆふに、
三すぢの糸の音にあはせ、うたふしらべも青年の、
心の駒をくるはせる、言の葉色もきよからぬ、
水にまかする浮萍の、我身の末ぞくちをしき。
昔の友は梅さくら、菊の操のかぐはしき、
心をつゝむ花のそで、うへにかさぬる衣にさへ、
うきし色なき娘氣の、まだ世心のくもりなき、
胸のかゞみにわが姿、いかにいやしく寫るらむ。
かつて勤のかへり路に、學のそのゝ花の香を、
袖にみたせてかへり來る、昔の友に逢しとき、
人目をさすがいとひてか、知らずがほにも過ぎ行ぬ。
おなじ野中に咲きいでゝ、などて我身は雨露の、
なさけに漏るゝことやらむ。定なき世の木枯に、
父と母との二もとの、我力ぐさかれしより、

此世も秋の末野原、　つれなき風にうちなびき、
ふしてもまろゝ糸薄、　こぼるゝ露に袖ぬらす、
人のなきさへかなしきに、　刺あるさうび鬼あざみ、
色香に人をあざむくと、　世の人々にのゝしられ、
のゝしる人は春のてふ、　うかれ心のはてしなく、
愛るといふもしばしのみ。　色にしあけば香にねむり、
香にあけばつゆにゑひ、　もし秋風にはね折れて、
はかなき夢のさむるとき、　怨を花におはせつゝ、
積る塵なき友垣の、　なかに移してときはなる、
松と藤との千代こめし、　契をむすぶ人ぞなき。

たえまだになき雨風に、　なやみつくして漸くに、
つもるうきめをのがれしに、　如何につれなき世なりとて、
母とも思ふ姉ぎみも、　結ぶみのなき山吹の、
黄金の色にまよひてか、　もとの姿にかへれとは。
あらき野わきにくねりても、　花の色香はおなじきを、
園生の菊はあさゆふに、　やさしき光うくれども、
われらは晴れぬうたがひの　隔の雲におほはれて、

み空こひつゝ渕むなり。　血しほをわけし人さへも、
胸に志げれる思草、　思ひやりても一志づく、
涙のつゆもたまはらぬ、　なさけしらぬは世の常と、
思へばなほも世の中に、　なさけあれよと願ひつゝ、
神も佛もゐまさぬと、　思へどゐます心地して、
助いのるも迷かも。

かくてうき世にながらへば、　怨なやみのつもるのみ。
思にたへぬ我胸は、　などて死なぬと身をせめぬ。
死なむとおもひ定めても、　あまり此世のつれなきに、
思のこりて死がたく、　ためらふひまにいつしかも、
あかつきちかくなりにけむ、　あれいま打つは明の鐘、
見かへる空もはれ渡り、　やさしく殘る星一つ。
なにとはなしになつかしく、　思ひこがるゝ父母も、
いづこの果かしらねども、　われをまちてもゐますらむ。
今も我身をまねきつゝ、　ことゝいひます心地する、
いつまで人をうらむべき、　いまは思ものこさじな。
さだめなき世の夜嵐に、　ちりゆく花をさそひつゝ、
流るゝ水を朧夜の　月のひかりに見おくりて、

われも哀とおもひしに、　こよひはおなじ其水に、
あはれ我身もさそはれて、　ながれゆくへはいづこかも。

かくて水ぎはにたちよりて、　願ふともなくみ佛の、
み名をふたゝびくりかへし、　情ありげの川水に、
花のすがたをまかせけり。

花の一ひらちるをさへ、　をしむは人のつねなるに、
世のちりひぢにたえやらで、　今を盛の八重さくら、
ゆくへもしれぬ川水に、　花のすがたをまかせしを、
あはれとも見る人ぞなき。　をさまる御代のためしとて、
黄金のいらか玉の棟、　門をならべて住なせる、
廣き都にたゞ一人、　娘をもてる親なきか、
妹をもてる兄なきか、　などてかく世は情なき。

今様二首

貴船の奥の　たにかはに、
ちりてながるゝ　山吹の
花とともにも　ゆくはるの
すがたさびしき　ゆふべかな。

よすがらふきし　山風に、
花はのこらず　ちりにしを、
なほも蝴蝶の　かをとめて、
木のまにけさも　さまよへり。

波上の明月に南洲を憶ふ

曲浦生

月明の夜既に三更に及んで、孤り伏戸を拔け出でゝ、四顧寂莫たる海邊に立ち出づれば、寄せては歸る仇浪の、汀を洗ふ音いと靜かに、涼風袂を吹いて、懊熱を拂ふ。誰人の乘り捨てにけん、岸に引きあげたる漁船の船端に腰打ち安めて、遙に眸を前程に馳すれば、霧靄深く房總の諸山を罩みて、天海共に渺茫際涯なく、望後の片割れ月は、皎々として影を万里の浪に漂はせ、更に一點の漁火だにもあらず、陸上我に伴ふものはたゞ孤影あるのみ、誰か此時、一片の感慨胸を衝いて

出づるものなからざらんや。月と水と我とのみの此大天地間に處して、情念鬱懐の迸り出づるものなからざらんや。海底無量の秘密を藏して、水面一波を擧げざるに、燦然として月華を流す處、我を招いて、其絶美境中に包み、海の秘密の奥に潜むを喜ばしめんとするが如く、我心またしかく動くことあり、且や我たゞ一人のみならで、情懐の人と共ならんにはと思ふことあり。於是乎ゆくりなくも、疇昔の夜、筑紫潟月明かに涙靜かなるを臨み、肝膽情懐相許し、死生一時を契りし二人の英物が、思の逼る處、正に彼夜に當りて、皎々影を波上に流せる月明の好景に誘はれて、相抱きて水に投じたるの心事の優美誠實なる、今更に其ゆかしさの忍ばれにき。吁、何等淺見陋識の人ぞ、筑紫潟の南洲を評して、月照を欺くものとかなす。月照の胸底ぞ其名の稱するが如くに清らかに、南洲の想念また明月の如し。明月皎々たるに似たる二友の月華の流れを洋々たる波上に追ふ處、何ぞそれ優ならずとせんや、何ぞそれ誠ならずとせんや。情念の迸り出づる時、豈に何等の詐りを藏さんや。此夜、此月と此水とに臨んで、英雄の風采心事ほのかに我前に浮び出づるが如くに感ず。歸來同人と之を談じて、共に情熱の士南洲を憶ふと切なり。

人？惡魔？(其二)

青柳有美

〇至小きベツレヘム

大なる墓標は、徒に人の心を反かしむるのみ。何ぞ其傲然たる!?!何ぞ其慢然たる！あゝ！唾きせん、あゝ！鐵拳を食はせん。食はせて倒さずんば飽く能はず、唾きして穢さずんば飽く能はず。我れ一日染井の墓地を訪ふて深く之を思ふ。丈をこゆる白檜木の墓じるし太く花やかにして、勳何等從何位の文字嚴めしけれど、之を見て不快の情感激甚なるのみ。人はよく強を挫いて弱を助け、大を惡んで小を憐れまんを希ふ、實に至情の然らしむるものならんかな。友に告ぐ、我れ逝くも爲に石の碑を建つる勿れ、一人者の力よく運ぶに堪へざる如き木標も亦た建つる勿れ。乞ふ、古くして將に腐れなんとするみそぼらしき一片の木ぎれ、尺餘ならざるものを取り之を植へよ。後の世に情あるミユーズ其傍を過ぎば、

限なきのあはれに筆の花を獻げ、世に味氣なきを觀せる佳人之を見ば、温き涙の水を手向け給はん。此の如にして人の憐れみと情けとは我が頭に加はり、乏きことなく寂しき所あるなからんか。」最小きユダヤの地ベツレヘムまた遂にユダヤの郡中にていと小きものに非ず、イスラエルの民を牧ふべき君その中より出づ。皇天上帝の祝福の加はるところ又常にさゝやかなるもの丶上にある乎。我等の父は、情あること我等の如く、憐みあること我等の如きものなり、之に涙あり之に焔あり。神の恩惠を蒙りて文化の母たりしは、小きグリースの半島なり、小きローマの半島なり。然れど、大なるグリースは咒はれ、大なる羅馬帝國は亡ぼされたり。漠々數千里に亘る熱帶の沙漠は、サフランの花を咲かする能はず、大國支那將に老て朽ちなんとし、"SNUG LITTLE ISLAND,"の英蘭土は、今や却て大不列顛、合衆帝國の譽れ高からんとす。文明は多く海岸線の凸凹甚く、山嶽崎嶇の地に發生し、廣き一面の平野はたゞ豺狼を産するに名あるのみ。天意のあるところ、かくして知るを得べくんば、我は絶東の一小島國に生れたるを拜謝するや切なり。身に祝福の豐かならんことを希ふ今の君子よ、先づ自らを小きものとせよ。然らば、『智慧も齡も彌増り、神と人とに益愛せらる』ることを得るに庶幾乎。

○ユトピア二つ三つ

男子を敎ふるに男子を以てし、女子を敎ゆるに女子を以てすべしとは、これ凡俗の等くいふところなるへし。されど我れは思ふ、男子を敎ふる女子に如かじ、女子を敎ふる男子に如くはなしと。もし男女兩性各相異る所あり、兩者合して始めて完なる人を得るものたらんには、女子は男子に就て己が有たざる所を學び、男子は女子に就て同く之を得、以て完全に近くを得べけん。故に我れをして一のユトピアを建つるを許るさば、小學以上大學の敎授に至るまで、凡て男子に、師たるもの悉く之を女子となし、女子に師たるもの悉く之を男子に取らん。◉人如何につとめて其衣服を飾るも、肉躰の艶美なるには如かじ。ソロモンの榮華の極みの時だにも其裝百合の花の一つに及ばざらば、まして凡々平々の粧飾よく躰形の美に踰ゆるを得んや。佳人如何に粧ふも、人を悦

ばしむること、亦其膚の優かなるに及ばざらん。然らば、飾るは飾るの謂に非ずして損ふの謂なり。故に思ふ、文明その極度に達すれば、人は裸躰の動物となり、世は之を恥とせざるに至らん乎。泰西諸國、婦人の禮服にその肌を顯はすもの、既にこの兆なりといふを得べけむ。我れ幸にして一のユートピアを建つるを得ば、法令を全地に布き、なほ臺灣に阿片の飲用を停止せんとするが如く、漸々衣服の着用を禁止し、よく躰質をして寒暑に堪ふるものたらしめ、之を一大裸躰國にせんことを希ふ。然らば、人間の憂苦辛勞また減ずること何分なるを得ん乎◉一日同人相會して快談時を移す。仲に殘花氏あり、說をなして曰く、今日の食物なるもの便なりといふべからず、文明の進歩は、夫れ或は之を流動躰の如きものとなし、炊煮鹽梅の勞なくして少量よく身の營養たるを得るに至らんかと。我れ以爲らく、然かなり。かの今日世にある牛肉越其斯蝋越其斯の如きもの、既にこれが兆たるには非る乎。今や盛に各國の局方に用ひらるゝ規尼涅の如きも、もと印度の土人が規尼涅と稱する樹木の皮を取り、之を煎じて解熱劑に用ひ居りしを見て、その木皮を精製し其粹を聚めたるものなりと聞けば、食物の如き亦文明の進歩と共に、たゞ今日に所謂食物なるものゝ粹のみを口にし一ヒ三ヒ位のみを以て足れりとするに至るや必せり。故に我がユートピヤ國は切に越其斯の簡易安直なる精製法を工夫し、これを一般の食用たらしめんことを期す。これ亦時間の無益に消費するを省くの道ならん乎。

案山子廼舍諸社中詠草（其四）

池袋淸風大人斧正評點

大阪第一社

豫題

森納涼　　伊藤登喜子

、涼みすと立よる袖にふく風の夏も身にしむこからしの森（立よりてすゞむたもと）

評　初五申旨あり

山納涼　　提鉦太郎

、谷川の音もきこえて山松の梢ふきこす風のすゞしさ（峰よりかよふ）

評　音のすゞしさならばさもかくも風のすゞしさにては詠者は猿の如く山松の上に居られればならぬやう也

夕納涼　　垣田廉

ゆあみしてころ色衣（蟬の羽）夕風にふかるゝ時そ夏はうれしき

評　ころ色衣立しからず

山館納涼　　永井鶴子

やり水（瀧の落る）に庭の飛石玉ちりて夏ともなし（しらぬ）山かげの（の下）菴

評　やり水位にて玉ちるともいはれぬやう也ともかくも思想は新也

布袋和尙川を渡るかたに　　池袋節子

目に見え（人しれ）ぬ寶をもちて渡りなばわたり（うき瀬も）はやすき此世也けり（ならまし）

席上即題

夏山居　　大畠榮子

蚊やり火のいつし（けふりも）かきえて山松にうき世の外の月を見る哉

評　何となく高尙也

今村幸子

山松に夕立すぎてひぐらしのなく音涼しき我いほり哉

評　蜩は初秋のものなれど夏の末よりなく所もあるべし殊に山中には然り されど夕立なくば夏題とならず

伊藤登喜子

のがれ住む我山里の松風にうき世の夏をよそに見（はわすれけ）るかな

評　のかれすむといはど更によそに見るとは重複也

池袋節子

山（岩）蔭の清水おとする（わきて流るゝ山蔭に）ほとりこそ夏のいほりはすむべかりけれ（り）

評　是は題意の希望のみ也

夏旅　　仝人

旅なれば長居もならし（いそぐへき旅路なれども山）川のへの夏なき宿に一夜とまらん（れなまし）

評　夜宿するなどとまるといふは俗也

時文

○新小説　第一號　　春陽堂版

春陽堂主人新に、露伴氏が監督の下に「新小説」なる月刊雑誌を起す。其告白の文によれば、大に義俠的精神を出して、未成名未出世作家に少からざる同情を寄せ、社會に信認せられざる文士の著述を世に公にするの危険を冒すを毫も顧みざらんとするものなりとぞ。現今文界の爲め、其の志や實に嘉すべしとなす。其第一號載する處水谷不倒生の「さびがたな」「うすくちびる」の二編あり。不倒生の文字、よく篁村竹の舍の老筆に比して、毫も遜色なく、而も將に彼が壘を壓せんとすと稱す。是非能く判する處に非ず。然りと雖も、其文の熟達圓滑輕妙なるは、確に當時青年文士の間に一旗幟を立つるに耻ぢざるものなり。

「さびがたな」の趣搆は敢て斬新なるに非ず扇問屋の女房美（うつく）しいお樂が、夫思ひなるにも拘らず、ソハとしたる性質に、モグリ慶菴婆のお牧が佞辯が見入りて、番頭の初次郎と姦通し、偖て一口の錆刀が、お樂の亭主李右衛門と初次郎との緣をつくり、また其錆刀がたゝりて、初次郎お樂二人の姦婦姦夫が、其刃の露と消ゆるに至りたりといふなり。全篇奇語險句なしといへども、お樂なる女が心の變化、

なかく\に妙に書かれたりといふべし、お樂は即ち世間並の女子を代表せるものともいふべきか、一般定見なき女子ならばお樂の境遇に處して、お樂たらざるもの鮮からざるべしと思はるゝ處を描くと、やゝ其巧みなるを得たり。「うすくちびる」これは前篇の附錄である丈けに、其價値も夫れ相應なり、文園滑なりといふの外妙趣あるをなし。

○小弓御所

弦齋作　春陽堂版

弦齋の小說は詩趣を缺き、情熱に乏しといふと雖も、彼が多作が一々、平凡なる世俗の嗜好に投ずる所以のもの、また彼に得意の長所あるに由らずんばあらず。「小弓御所」は曾て報知新聞に連載せられて、多くの愛讀者を得たるもの、今一册に纏括せられて、春陽堂の手を通じて、例の美本として、世に出づるの時、今更に多くの好讀者を集むるならんか。足利義明、玉照姬これ弦齋が常用の人物にして、而も此種の人物が却て凡俗の嗜味に尤も能く適合するものたらずんばあらず。

○世界の日本

民友社と離れて、時事新報に入り、更に此處をも出でたる竹越與三郞氏は、今新に「世界の日本」なる一大雜誌を創刊す。期する處スペクテートルの如く、またコンテンポラリー評論の如く、以て日本文壇に嶄然の頭角を露呈せんとするものなり。其の第一號及び第二號を執りて之を見るに、社說の筆鋒の頑軟につきて、世に兎角の評なきにあられど、其邊の處は、暫く推究をやめて、偖て材料の豐富に且つ宜しく撰擇を加へたる處、「太陽」「國民の友」「日本人」に比して頗る伯仲を爭ふに足れりとなすべし。

○史海の廢刊

鼎軒氏議會に入りて以來、史海の發刊暫く中絕して、其多趣味の史論を聞くに稀れなりしが、近來に至りて、再び之を聽くとを得たるを喜ぶ其間もあらで、此度はいよく\史海廢刊の廣告せらるゝを見て、文壇の爲、史界の爲め、大に痛嘆す。されど日本のジョン、ロード君、希くは其餘力を以て、經濟雜誌上に其輪截的史論を述し、歷史の燈台光を熾すと益多からんとを望む。

○岡山孤兒院新報

岡山孤兒院新報出づ、孤兒院が自ら以て任ずる其天下の事業の發達と、彼等熱誠篤信の慈善家等が精神を露すもの、實に之によりて聞くべし。其第二號記する文に「孤兒を社會に出す事につきて」といへるに

大膽に社會に出す可し、生命ある人の子は如何なる境遇に立つも決して亡びるものにあらず、蹶くと滅ひるとは同一にあらざるなり、人は屢蹶かん、されど眞正なる進步の階段にして憂となすに足らず。

とあるもの、これ石井君につき屢々聞くの精神にして、また彼大事業を貫中するの精神たらずんばあらず。石井君が此精神を以て、無告の孤兒の爲に一生を奉ずるため、天下は之に向つて大謝せざるべからず。此精神を知らんとせば世は此新報の出づるを歡迎せよ。

○鍛練せる人の語

當時活人形作師の妙手を安本龜八翁となす、翁年正に七十有餘、數十年間の活人形作の經驗と鍛練とによりて、悟得せるの處、此頃「速記彙報」によりて吾人に傳はる、實に多く學ふべきの語なり。其語中特に女子に關するもの之を左に摘拔す。

カタワモノヤ威張ッた顏などはやりいゝ、戰爭の人形などはやりいゝ方で、一番むつかしいのは女の人形で、美人ほどむつかしい、愛敬のある顏は別してむつかしい、愛敬のある顏を寫して愛敬が出ない、愛敬と云ふものはドコにあるものか、むつかしいものです。

オイランは顏を作りて居るから人形に拵へるにやさしいが、化粧をしない美人は實にむつかしい。

年が寄ッたら美人の人形などを作るものではありませぬ、迚も本當には出來ませぬ。俳優が自慢で老人になッて若オヤマをするが迚も本當のことが出來るものでない、骨を折ッてもそれだけに骨折が見えませぬ。

○婚姻進化論

法學士　藤井宇平氏譯

本書は芬蘭大學校社會學講師、ウェステルマルク氏の原著を譯したるもの、婚姻の起原より、人間婚姻の古き事、亂婬の假説、親屬相婚の禁、掠奪婚、賣買婚、人間の婚姻の制度、等に及び六百四十餘頁の冊子なり、婚姻に關する研究は、社會學者の最も力むる所、且つ面白き問題なれば、之に關する著作も世に尠なしとせず、本書は近刊丈けに在來の假定説に一段を進めたる觀察なり、末段「人間婚姻の歷史は女子と男子の情慾、癖見、及私慾を漸次征服したる歷史たる」なりと結言する如き、面白き見と云ふべし、本書は學者の參考に適す、我國の婚姻史を研究するものゝ模範とする價値あり、正價一圓六十錢、發行所は本郷六丁目哲學書院。

○今日の文章

慷慨憂國の文字に、熱涙なく、たゞ激發するを、肝癪玉のハゼケるに異ならず。堂々たる政治論、際限なき黨人の私爭に止まり、高尙なる文壇の論爭一に漠然捕捉すべからざる空論の小ぜり合に限られ、美文に靈情を欠きて、其不健全なるを、狹斜中籌の事を描かずんば、空名を博し難しとなせり。賴みなく、望みなきは、今日の文章なり。何の日か實に世を救ひ、民を益するの大文章を見るべけん。

女學論題一斑（七月下旬より八月中旬まで）

○女子教育論一斑（三輪田眞佐子）　女鑑第百十三號
○女性の愛情（蝠翁百話）　時事新報七月二十三日
○家庭に於ける宗教（鈴木大拙）　如是　第四十八號
○吾黨の諸氏何故に女子傳道に務めざる乎（綴稿）（田中泥牛）　密嚴教報第百六十四號
○大島圭介君の家庭教育意見　同志教育第二十二號
○女學界の風潮　家庭雜誌第八十三號
○女傑フランセス、パワア、コツブ　國民の友第三百七號
○女學生の注意　新少年第十三號
○明治女大學　同上
○新撰女大學（深井仁子）　新少年第十四號
○伊藤伯の談話（日本の新婦人）　日本　八月十七日
○ストウ夫人（潮外漁史）　世界の日本第二號
○伊藤首相と女子教育　毎日新聞八月十六日
○女子の職業（刺繡、造花、電報調査所員）　報知新聞連載
○家庭の不和、婚姻の零落　福音新報第七號
○女子高等普通教育の必要（スザーン、エー、シアール女史）　英文國民の友第七冊
○現時の女子教育（山本良吉）　日本人第二十五號
○大鳥圭介氏の女子教育　なでしこ第二號

投書

女學校の應接

日陰者

余は元來女學校と云ふ者には緣故薄く、且つ臆病小膽なる男なれば、嬌々たる佳人の群に入らるゝが、何より恥かしくて、自辨せざる可からさる要事あるの外は可成女學校の門戶をくゞらぬやうにと避け居る也。故に彼等の內情如何は知るに由なけれども日頃、來客應接の如何にも不躰裁、不都合なるには一驚を喫し居れり。中には綿密叮嚀に注意の行き届きてあるもあれど、先づ大抵は來訪者をして一種云ふ可からざる不愉快と嫌惡の念とを生ぜしむ。余の如き短慮なる者は腹立しさの餘りに足をげたてゝ、二度とは此しきゐを踏むまじなど思ひかねはせざるべし。或時余は○○の有名なる女學校を訪へり、いかめしき校舍は天を摩して余が膽を奪ひ去り、夕陽沒せんとして玻璃窓に映じ燦爛として輝き、余が目は眩らみぬ、漸く呼鈴を見出し二ッ三ッ打ち鳴らしつ、定かならねど直ちに窓の開く音しければさては取次の出で來るならんと謹みて待ち居たるに來らず、やゝありて上の方にて女のさゝやきの聞えけるにフト頭を上ぐればこはそも如何に二階の窓より二三名の女學生らしきもの（余は近眼なれば奴婢などの類ひなりしやも知れず）顏を揃へて余を見下ろすなりき、余は驚きて下うつむき今かくと靜かに待

てども〳〵人の影のチラとも見えず、もしや受附の耳に達せざりしか、それにしても全く人無きにもあらねば人の來りしけはひに心付くべきにと、今度前より烈しく呼鈴を試みたれど來らず、庭と思ぼしき芝生の上を逍遙しつゝありし學生諸姉は、一度は余が方に振り向きたれど獨りとして客あるに注意せしものなく、受附に其由を傳へし様にも見えず行き過ぎぬ、余はこらへ兼てスリパンの如く續けざまに鳴らし最後に「頼み申す」と大音にどなりたれど無益なりき、其日はそれにて歸り數日の後再び訪ひ前日の始末を繰り返へして歸れり、余は夫にもこりず其翌日も足を運び而して亦果さず、止むなく側らなる家に行き召使らしき女に要事を托し來りし事あり、げにたづぬる人に會はでむなしくすご〳〵と歸る恥かしさ氣まりわるさは、とても厚皮流の想像だに能はぬ可く、やさしき婦女子の堪えられぬ事なり、余は或時二三友に此事を洩らせしに彼等は口を揃ひて「アノ學校にては人が行くと窓からのぞいたり、受附の直ぐに出て來ないのは珍らしからず」と冷笑せり、さすれば之は余一人の僻目にあらざるを知るべし。其後又一つの有名なる女學校の塾舍を訪問せし事あり、此處は前者の如くならずして取次は時をうつさず出來るなり、要事に由りては一日に二度も同じ人をたづれし事ありしが例の女中は余を見覺えて余が足の玄關に止まるや否やたすきのまゝ窓より顔のみ突き出し、「誰樣は御留守なり」とかいらつしやいます」と早や呑込みに合點して余をして呆然言ながらしむる事屢々なり、其無造作、無作法なる擧動はしとやかなる女人の下に召し使はるゝ下婢とも思はれず。又或人急用ありて子女を該校に訪ひけるが、取次の言ふには校則なれば授業中御面會御無用なりと追ひかへし(校則を固守するはむしろ為す可くも)あまつさへ課業果てゝ後も其來意を訪はれし生徒に傳へざりし爲めに、いたく不都合を來たせしといふを聞けり、斯る事は絶えずあるよし此校の事情にくわしき人の語りき、然れど此不躰裁と不親切は唯に此二校のみにはあらず、他に於ても常に見る處常に聞く處なり、袖と袖すれ違ひても我より脱帽せざれば決して彼等より腰をかゞめられし例なし、之れや所謂女權擴張とのたまはゞ余は只默せんのみ。さりながら余は或種の人の如く現今の女學生はデリケシーを欠くとか、下だらくとか、ヤレ家事に疎く客あしらひが下手のと姑男の嫁に對する如く口から出まかせに小言をいひて責め立つるを殘酷なりと思へり、何となれば彼等は多年家庭を離れ世事に遠ざかり居れば、此等の事を實際に學ぶの機會と境遇に乏しければなり。故に余は常に世人が此邊を察せず喋々と面白げに非を擧ぐるを聞く毎に深く同情を以て氣の毒に堪えざる也。されどもし其人の心の内に一片の親切だにあらば、彼等諸姉の幼き擧動も却ていぢらしく氣の付かぬ折多きが中にも溫みを人に感ぜしめ爲めに見苦き事や不躰裁も掩はるべし、げに其校應接の如何に由りては取締、舍監など重立ちたる人の氣立までかくあらんと幾分推し量られて稍々尊敬の念も減ずる心地す、斯く云へばとて幾重にも世馴れぬ諸姉を責むるにあらず誇るにもあらず、只其花の如き心情爛漫と開き、濃やかなる愛のしづくを誰人の上にも注がれん事をのぞみ、擧動の如何よりも内心にかへり見る處あらんを願ふに過ぎざるなり。

げにかゝる小事の積り〳〵て女子教育の上に及ぼす影響尠からざるを思はゞ、乞ふすこしく注意されては如何に〳〵。

我宿のひとむら薄まねかなん
　とはですきゆく人やとまると。
折らでゆく袖にも露ぞこぼれける
　萩の葉しげき野べの細みち。

片々

◎新撰女大學　万朝報募集の新撰女大學は、其選に入らんと欲して投書する者多く、朝報社にては福羽美靜、加藤弘之の二氏に托して其撰擇を行はしむるといふ。因にいふ「新少年」と名つくる雜誌、此頃樣々の新撰女大學なるものを載す、これまた万朝報募集に緣あるものか。

◎教育時論　に見たる清水直義なる人の說に曰く、小學校教員の欠乏に處するの策、否其一策は、大に女教員を養成するにありと論じ、師範學校男生徒の定員を中減となすべし、これと同時に其數に充つるの女生徒を募集すべしと說く。

◎各府縣將來の學事施設中　なほ後より報じ來るものによれば福岡縣は、高等女學校を設置することをいひ、千葉縣は女子就學の增加策をいひ、茨城縣また之をいひ、岡山縣は高等女學校の設置を要し、秋田縣は女兒就學の普及を計らんとし、山梨縣、和歌山縣、長野縣も亦之をいへり。

◎秋田縣知事の　教育事項諮問案中に目下高等女學校を設置するは尙早きやの目あり。

◎婦人雜誌中に　なほ秋田婦人會より發行する某雜誌一ッに京都反省雜誌社より出づる『反省の鏡』とあり、後者は今漸く其三號に達せり『大和心』なる雜誌亦來る十日に出でんとす。

◎ピヤノと自轉車との關係　とは何ぞや倫敦新聞曰く自轉車流行の爲めピヤノ匠は職業が閑になりたとて恨む其故如何といへば妙齢貴女皆車を郊外に驅て復ピヤノを手にせず家に歸れば復疲勞彈奏の勇なし故に然りと。

◎婦人は水の如し酷の如し　婦人尙幼なる時は水の如し十二歳より十五歳レモナーデの如し十八歳より廿五歳三鞭酒の如し廿五歳より四十歳利久酒の如し四十歳より五十歳衛蔔酒の如し五十歳に及ばゝ變じて酷となると此れは之れ露國新聞の言。（以上二件東京日々新聞）

◎其夫を賣るものあり　夫其妻を賣るもの、これを蠻野無智の民に聞く、然るに今は米國に於て、以太利人某なるもの、二人の女の爲めに、夫の地位を賣買せられ其結果裁判沙汰とまでなれりとぞ末世になれば、樣々の事も起るものなり。

◎日本新聞の　白雲生いふ、女作家の時を得顏なるは、其女性直に今日纎細の文品に通ぜるに依るもの多からん。人はいふ今日の文學界女作家を出せる者、猶亂世の間巴板額の女武者を出せるに均しと時勢なるかなと。

◎一工女の製糸量　長野縣諏訪郡にて平均工女一人の製糸數量割當の年額『蠶業雜誌』に依るに右表の如しとぞ

明治十四年	十五年	十六年	十七年	十八年	十九年	二十年	
五五	四六	五三	五二	五五	五五	五四	
二十一年	二十二年	二十三年	二十四年	二十五年	二十六年	二十七年	二十八年
五七	五九	五四	六一	七一	五九	六一	六四

◎女子の電話業　巴黎の女商人米國に於て三万七千人以上の女子電話業に從事すといふ。巴黎にては商家の女主人凡て八千人。

◎家庭雜誌　女學界の風潮を論じて曰く
戰後國民位地の異動に對し、女子教育の一層切要なるものあるを次第に識者に唱說せらるゝに至りたれば、女子教育の前途は望み多きと勿論なりと雖も、現時の如く女子の教育に精神なく氣魂なく、信仰なき間は未だ遽に其隆盛を見るべからざるが如し。

◎田中泥牛　なる人密嚴教報上に叫んで、佛教家凡て女子教育女子傳道に不親切なり、不熱心なり、基督教徒の如き女子教育家と、女文豪とを出さず、其雜誌の如きもの佛教界に非ず佛教女學雜誌はみなこれ乾燥無味のものなりといふ。

⦿日蝕觀測　の爲め米國ドッド夫人は其夫ドッド博士と共に我北海道枝幸に來りたるに、天この志を憫まず、密霧深く閉して、觀測の計畫希望、悉く水泡に歸し、夫人これが爲に一時泣き伏したりといふ。

◎前田五二　日本の美術、日本の工藝、日本の品位を低からしむるものは、一種いふに忍びざる、吾人同胞姉妹の耻を海外に曝すに在り、國家の躰面上遂に之を如何すべきと慨す。然るに京都五二會の今春出品陳列會は、五花街の醜業婦を招請して多數の觀覽人を引きたるとありといふ。

◎女子の漢字新聞　生駒悅子といふ日本婦人支那上海に到りて『蘇報』なる漢字新聞を發行すといふ。

◎山本良吉氏　の『日本人』に寄せたる「現時の女子教育」中いへるとあり、女子の天職は子を生むに在らずして子を活かすに在り、夫を樂しますに非ずして、夫を救ふに在り。今の女子は共に樂しむべし。共に苦む可らず。共に安んずべし、共に進むべからずと。

◎伊藤侯の談話といふもの　頃日諸新聞に見えたる伊藤侯がデイリーニュス巡遊記者との談話といふもの、實は侯が幕僚某の談話にして、侯自らいふものに非ずと。されば其華族女學校を失敗といひ、賣淫公許を是とし、女子淸德の誇りなど、一々これ侯の持說ならざりしを喜ぶ。

◎福翁の　女性愛情論にいはく　我輩は女權を言はずして、寧ろ女情の重きを論ずる者なり。否な其女情を重んずるは、直接に女權振興の根本として、特に之を主張する者なりと。

◎米國大統領改撰に付き　マッキンレー氏を其候補者に擧げたる共和黨の政綱に「我黨は婦人の權利を尊重し、合衆黨の失政を匡正するが爲め婦人の協力をも歡迎せんとす」とあり。

時　報

◎高等女子師範學校保姆練習科

女子高等師範學校にては今回保姆練習科なるものを設け定員凡二十名の入學を許すといふ。入學者資格は修業年限六ヶ年の高等女學校卒業、若くは之と同等以上の教育を受けたる者にして。年齡滿十七年以上三十年未滿の者とし、修業年限は一ヶ年にして、學科は脩身、教育、理科、圖畫、音樂の五科目なりといふ。來九月入學試驗執行、志願者は同月七日までに同校に申出づべく、試驗期日は同月十日、入學試驗科目は、躰格、國語（講讀、作文）歷史（本邦）數學（算術）理科（大意）圖畫（毛筆畫鉛筆畫隨意）音樂（唱歌）。尤も學費は自辨にて悉皆通學の由也。

◎實業補習女學校

今回千葉縣夷隅郡大多喜町に設立せられたる、實業補習學校は、專ら女子普通教育の補習をなさしめ、實業上の要素を授くるものにして、學科は讀書、算術、習字、裁縫、機縫、染物、製絲、養蠶となす。

◎女子乘車の禁止

西伯利鐵道事務局にては東洋諸國より渡航せし婦女子は確實なる保證を得るに非ざれば內地に向て乘車を禁すべしとの決議をなしたる由浦潮港より特報ありたりとは長崎電報の傳ふる所。

◎南濠英國植民地の婦人選擧權

南濠洲の英國植民地にては本年始めて婦人に國會議員の選擧權を與へたり同國にては過去三年の間に於て選擧權所有者の數漸次增加して當初七万三千零卅二人なりしもの本年は十三万六千三百五十人に達し中に就て五万九千六十六人は婦人なりと現に或る選擧區にては婦人の選擧者遙に男子よりも多く從つて國防黨と勞働黨の二政黨は婦人選擧者の歡心を得るに努め雙方共に婦女に對し深き約束を結べり。

◎米國女富豪の遺産寄附

米國の富豪婦人は死後七十五萬弗をエール大學の學資金として寄贈す可き旨の遺言書を作り之を大學に通知せしかば總長ドワイト氏は去六月二十四日評議委員會の席上に於て報告せるよし此條約寄附金は往年のヴアンダビルトドーミトリー氏の義捐せる八十萬弗を除き獨力を以て此大學へ送りし寄附金中の最多額なりと云ふ。

◎ストウ夫人の逝去

「アンクル、トムス、ケビン」の著作を以て、巾幗の織手、よく十九世紀歐米の天地を震動したるハリエツト、ビーチヤー、ストウ女史は、本年六月十四日を以て其八十五歲の高齡に達せしが、越えて數日七月一日溘焉として、其ハートフオード市の私宅に逝けり。世界の文星また其一を墜す、哀い哉

◎東京女子電話交換手募集　今交換局に於て濱花町分局開始等の爲め交換手の必要ありて募集中なるが是迄の通り男女共入用ながら特に女子多數を要すと云ふ。

◎眞宗婦人會の義捐　福嶋眞宗婦人會に於て本宮及び郡山に幻燈會を開きて得たる金拾七圓餘を三陸被害地へ救與したり。

◎瓜生いわ子　慈善家の名高き瓜生女史には、今回の三陸地方海嘯災害につきても救恤の運動の爲、其老體を厭はず奔走し居れりといふ。

◎大日本婦人衛生會の義捐　前號報道後の詳報によれば、大日本婦人衛生會にては三陸海嘯の罹災者救恤の爲め役員の發起にて府下各區に委員を設けて會員へ衣類の寄贈を求めしに衣類千餘枚外に金六百圓の義捐ありしに依り右金を以て更に衣類を調製し總計二千三百餘點を三縣罹災地へ寄贈せり尙ほ其役員醵出の殘金五十圓は福田會の嘯害地方孤兒保育の中へ寄贈せりと。

◎工女の貸錢　當時製絲場にては工女の欠乏を告げ居る向もあることは曾て本紙上に記載せしが全體斯く工女の欠乏を告げしは要するに貸錢の相違より起りしことにて當時岩井郡の一進社の如きは十夕に付き四錢五厘宛給與し居るよし因伯新報に見ゆ。

◎女學校記事補遺數則

◎東京府高等女學校は七月十九日、新築落成式を兼れて、三月卒業の生徒に、卒業證書を受與せり。近江彥根町立高等女學校これは女學に熱心なる甫守謹吾氏の校長たる處にして、七月一日創立紀念式を兼れて卒業式執行、卒業生人名は

本科　小川すい、宇治原すゑ　外村よしえ　江北川やす

補習習科　中川繁野　北村たつ

の六人なりしとぞ。神戸私立松蔭女學校第一回卒業證書授與式を執行したりといふ。

◎檢梅を恥て自殺す　時事新報の報道によるに臺灣の當局者は梅毒の蔓延を防ぐため土人と內地人とを問はず淫賣婦と認むるものは總て檢梅をなすことゝなり淡水支廳にては既に土人の淫賣婦を拘引して檢梅されしもの五六十名に及びたるが慙愧に堪へかねてや內二名は身を淡水河に投じ他の二名は阿片を服して自害を遂げたりとぞ猶ほ右の如く土人の檢梅をなすことゝなりしより忌避の餘り支那內地へ去るものも尠なからずと云ふ、彼等醜業を營むの徒と雖も、なほ恥の恥とすべきを忘れざるあり、之を我邦本土の醜業婦が、彼醜恥に堪へて、恬然無恥なるに比すれば可憐の情なきに非ずや。

◎學齡未滿兒童就學の嚴禁　西園寺文部大臣は去日北海道廳府縣へ『學齡未滿の兒童を小學校に就學せしむるは學校管理上に於て不都合あるのみならず兒童身神の發育上其害尠からざるを認め嚮に學校衛生顧問に諮詢したるに之を嚴禁するの必要あることを答申せり就ては自今深く注意し學齡未滿者を就學せしむるが如きことなき樣嚴重取締るべしと』訓令せり。

◎佛國新結婚條例　佛國に於ては今回民法中結婚條例を改正して結婚の手續を簡略にせり即ち其重もなる改正點は從來男子三十歲以下婦女二十五歲の結婚にして双方の兩親不承諾を唱ふる場合には其認許の追願を三回迄爲すを要せしも今回は之を省略して追願一回に止め且つ此追願も男子は二十五歲以下婦女は二十一歲以下に程度を引下ぐることゝせり且つ結婚の廣告も兩親へ追願後一ヶ月を經過するときは之を許すことに改めたりと云ふ。

女學雜誌定價表

前金	壹冊定價	金拾錢
	一年前金	金壹圓（無郵稅）

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治廿九年八月廿四日印刷
明治廿九年八月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治

印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場（電話十九番）

早稻田文學

八月十五日發兌　第十六號　目次

本欄

定價一部郵稅共前金十錢　六部五十七錢　十二部一圓八錢

發行所　東京牛込區大久保余丁町百十二番地　早稻田文學社

「ベビー」手みしん

「志ろうと」も直ちに使ふとを得べし。音もせず、八釜しくなし。机の上に置き、座りながら扱ふとを得べし。形小さく、取扱ひ方至極容易なり。直段尤とも廉なり。
右代價正金五圓也

日本及支那一手販賣店　横濱居留地五十番　エッチ、セーデ、ビンソン商店

東京代理店　麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

帝國文學

第二卷第八　八月十日發行

東京市京橋區銀座一丁目廿二番地　日本圖書株式會社

大倭心

女子教育及文學美術之要報

初號九月十日發行、一部定價郵稅共金拾錢三ヶ月前金全五十五錢半年全壹圓為替は芝口郵便支局振込女教社宛

初號要目○女界の立道與敎●世界女誌し(坪井正五郎)○上代の織もの繡もの(小杉榲邨)●遠州流の祖小堀政一(横井時冬)○なさしの姫物語(哀れ深き古小說)○羽衣(長篇新躰詩)桂月(史論)柳涙(小蓋)其他種々講義○普通文典(與謝野寛)○家政學(松下菊子)外數篇跡見花蹊女史の氣韻極て高き木版日本紙摺繪畫外數葉

東京芝區新櫻田町十九番地　女教社

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可